

〔物語〕 関東大震災からの復興と築地小劇場の興起

― 小山内薫、土方与志、山本安英、東山千栄子 ―

第一節 大震災前夜における新劇と新劇人

第二節 大震災による新劇人の衝撃と覚醒 その一

第三節 大震災による新劇人の衝撃と覚醒 その二

第四節 大震災からの復興と築地小劇場への構想

〔物語〕 関東大震災からの復興と築地小劇場の興起― 小山内薫、土方与志、山本安英、東山千栄子 ―

第一節 大震災前夜における新劇と新劇人

関東大震災が勃発し、築地小劇場が興起する一九二〇年代には、維新以来の文明開花を受けて、都市文化と大正デモクラシーが開花する。そこでは資本主義の発展に伴って労働問題の発生と社会主義への関心も顕著となった。大山功による記録『新劇四十年』は、思想統制の厳しい太平洋戦争末期の刊行ながら、幸福の追求という理念、自由・平等の原理に照らされた新劇勃興の意義を簡潔に伝えている。演劇の革新は坪内逍遙や森鷗外による西洋近代劇の導入で準備され、小山内薫と市川左団次による自由劇場の結成で本格化した。

新劇勃興と築地小劇場（大山功著『新劇四十年』）

新劇はわが既成演劇としての歌舞伎劇、新派劇に反抗して起ったものであり、いわば既成演劇の革新を動機として起ったものである。しかし既成演劇の革新運動は新劇勃興当時 に於て初めて起ったものではなく、それは遠く明治十九年の演劇改良の頃にまで遡ることが出来る。この演劇改良会は末松謙澄、外山正一を主唱者として当時の一流の官僚、実業家、学者、文士等が中心となり、市川團十郎を擁して、既成演劇の革新を目ざして起ったものである。その後尾上菊五郎、守田勘弥等が参加して演劇矯風会なるものへ再組織され、更に明治二二年再び組織を改めて日本演劇協会が設立された。

これらの会の目的とする所は従来のが歌舞伎劇を革新する所にあつたが、結局は彼等の演劇の本質に対する無理解と、それから招来された誤れる写実主義のためにいわゆる「活歴」と称される新歌舞伎劇を残したことと、演劇改良会が理想とした歌舞伎座を建てた以外何等の業績も残さなかつた。「活歴」は近代文芸、近代演劇に於ける写実主義とははるかに縁の遠い、皮相な史実尊重と徒らに高尚上品を銜う当時の官僚的國家主義の道徳的理想を主張した非芸術的な史観にすぎなかつた。……

こういう情勢の裡にあつてかつて日本演劇協会の文芸委員たりし坪内逍遙は、早稲田専門学校に文学科を創設し、欧州の文芸、演劇殊に沙翁劇の研究に没頭し、一方制作に志すと同時に演劇の研究、評論を発表していた。そして遂に明治三九年その門下生を擁して文芸協会を起し、演劇の全面的革新に乗りだした。又坪内逍遙と同じ日本演劇協会の文芸委員たりし森鷗外も西洋の文芸、演劇の紹介、翻訳、批評を物し、特にハルトマンの独逸美学の立場から先駆的な意見を發表し、實際の劇壇に多くの示唆を与えていた。そこに新しい演劇創造の機運は漸く動きはじめた。

更らに明治四二年洋式の新しい劇場たる帝國劇場の創立が企画され、女優の募集養成が開始された。また一方同じく洋式の劇場である有楽座が完成し、新派の一方の旗頭藤沢浅二郎は単独で東京俳優学校を立てた。そして、これらの新氣運に促進されて文芸協会は組織を一新し、演劇研究所を設立して實際の革新運動に乗りだす色々な準備をととのえた。

このような外面的な事情によつて漸く劇壇革新の新機運が醸成される一方、内面的にも新しい演劇創造の素地が出来上りつつあつた。即ち当時の人々、特に若きインテリゲンチヤは、わが國資本主義の發展と西歐自由主義の輸入とによつて、漸く封建主義思想、感情をもつた歌舞伎劇、新派劇に飽き足らざるものあり、自己の生活感情を充足さしてくれる新しい演劇を願望してやまなかつた。このような事情を背景にして起つたのが、明治四二年の自由劇場の創立であり、明治四四年の文芸協会の運動であつた。そしてここにわが國新劇運動の第一幕がきつておとされたのである。

自由劇場はいうまでもなく小山内薫と市川左団次との共同事業であり、明治四二年十一月第一回試演をもつてそのスタートをきつたのであつた。小山内薫は大學卒業後伊井蓉峯一座に関係して演劇の實際を研究すると同時に、日本演劇の批評等に筆をとつていたが、秘かに商業演劇の前途に深い憂慮を抱いていた。一方市川左団次は父を亡つて以来、明治屋の孤塁を守つて奮闘していたが、明治三九年松居松葉に従つて渡歐し、西歐の演劇の實状を視察し翌四十年帰朝した。そして彼の地の演劇界の情勢に深く刺激され、演劇革新を目ざして敢闘したが、当時の人々には却て冷罵を以て迎えられ、迫害さえうけやうとした。このような環境と立場におかれた二人が、昔日の交流を層一層深め、ここに相携えて新しい演劇運動を起すべく創立したのが、自由劇場に外ならなかつた。……

大正十二年の震災によつて東京の主なる大劇場は殆どみな灰燼に帰して、再び演劇なぞの復興は何時の日か分からないという状態になつてしまつた。しかし復興事業は意外に早く進捗し、演劇娛樂等に渴望する民衆は次ぎつぎに建てられるバラック式の劇場へ殺到するという現象を招来した。第二期に於て殆どその姿をかくしたかにみえた新劇団も次ぎつぎに再生してきたが、殆ど仕事らしい仕事をすることなく消えていつた。それらの中で最も大きな業績を残した中心的存在たるものが築地小劇場であることはいうまでもない。築地小劇場はかつての自由劇場の指導者であつた小山内薫と、氏に師事して演劇研究のため独逸に滞在していた

明治三十九年二五歳にして襲名し、明治座座元を引き継いだ二代目市川左団次は、亡父の追善供養のあと九カ月の海外旅行に赴いた。まずパリでは『ノオトルダム・ド・パリ』の舞台に接し、女優サラ・ベルナルとも会見する。ついでスイスの湖畔にウイリアム・テルの墓を訪ね、イタリアではミケランジェロの天井画に感嘆。ベルリンではイプセンの『社会の柱』やゴリキーの『どん底』を観劇し、さらにイギリスへわたって俳優学校を參觀するとともに、シェイクスピア祭に際して『ジュリアス・シーザー』等に接した。こうした研鑽の成果を抱いて帰朝後の左団次は、劇場と演出の改革に着手し、明治座で『ヴェニス商人』を上演するものの、徒らに反発と嘲罵を浴びるのみである。以後数年不振と失意が続くなかで、旧友小山内薫はたえず彼を励まし、扶け合うふたりの先覚者が、やがて自由劇場の創建へと前進した。②

市川左団次・小山内薫の自由劇場結成（『左団次芸談』）

① 大山功著『新劇四十年』三香書院、一九四四年。一三一―一七、六七頁。

② 市川左団次著『左団次芸談』南光社、一九三六年。九〇―一九四、九八一―〇四頁。

小山内薫「市川左団次の半生」（『小山内薫全集』春陽堂、一九三二年、春陽堂。第五巻、六七二、六七六―六七五頁。）

小山内君をそもそも私が知ったのは十七、八歳の頃で、其当時私は雑俳に凝って元数寄屋町の鶯亭金升氏の門に通っていたので、其運座で始めて顔を合わせた東亭扇升、又の名富士見小僧と云ったのが小山内君で、まだ軍人志願の中学生時代で、其後高等学校の文科に入ってからは余り運座には顔を出さず、大学時代は伊井一座の真砂座に関係していて、私の洋行から帰った頃には浅草の瓦町に住んで真砂座とも関係を絶ち、専念演劇の研究に没頭して、其研究の結果をば聞かしてくれたので、非常に心強く思ったが、私の劇場制度改革の失敗当時のことを、小山内君は「この興行中私は毎日のように彼を楽屋に訪ねた。私は出来る限り彼の〈孤独〉を慰めた。彼は誰にも云はぬ憤激を私に洩らした。十何年唯ぼんやり付合ってきた私と彼は、この時初めて本当の〈友達〉になったような気がした」と書いてゐる。

そうして仁左衛門氏が明治座に一座していた明治四二年の三月のことであつた。私は楽屋へ訪ねてきた小山内君をとらまえて「いつ迄こんなことをしていても、きりが無い。此間から話している計画を是非とも実行しようではないか。一年に一回でも二回でもいいから、実際に自分のしたいと思う芝居をば演ってみたい」と、相談したのだった。

小山内君とても勿論賛成である。然しひどく謙遜して、今の自分の学問ではまだ到底不十分であるから、みっちり勉強をする間、もう十年待つてくれないかと云いだした。けれども私は、そう云えばそうでもあらうが、然し今出来ないことは、十年経つても出来ないに違いない。思い立った以上は、直ちにやらなければ駄目だ、と促し立てた。全くのところ、自由劇場はただ此の勇氣だけで出来上つたのであつた。

従つて此の事業は世間からはかなり危惧の念を以て迎えられた。然し興行演劇に於ては自分の思う儘に芸術家としての使命を果すということが出来なかつたので、興行演劇を演らねばならぬ位置に置かれた私と

しては、此自責の念に全く苦しみ悶えていたのであった。そうしてせめては此自由劇場に依って俳優としての使命を果し、本来の演劇に為に尽したいと熱望したのであった。……

「始めて劇評の筆を執る」と書かれて、森田草平氏は縷々と述べられて、「これを要するに、今回の自由劇場第一回試演は予想外の大成功であった。それは役者の手柄でもなければ、背景のお陰でもない。直接イブセン自身の効果である。従ってイブセン劇を始めて日本に輸入した小山内薫、市川左団次の手柄である」と評された。

故鈴木木泉三郎氏は『俳優評伝左団次』の巻のなかで其時の模様を誌しているが、「第一回試演を行った時のわれらの感動と云ったら、まア何と云ったらよかろうか。丁度心の内に描いていた夢のような恋が叶った時の喜びにも似ているのであろうか。一人の友達はすこし取逆上せたのではあるまいかと思う程な、はしやぎすぎた態度と表情で、上ずった声でその夜は明け方近くまで、わたしの部屋でおしゃべりをしていた。も一人は一緒に芝居を見ている内に、陰気に黙り込んで仕舞って、はねてからよそで少しばかりの会食の間も、涙ぐんでいるやうに見えて、話し声など震えていた。」①

陸軍軍医たる父を幼くして喪くした小山内薫は、つとに東京帝国大学の学生時代に、文芸雑誌『万年草』に投稿し、森鷗外と上田敏の知遇を得た。鷗外を介して新派の俳優伊井蓉峰に紹介され、彼は深川の芝居小屋『真砂

① 市川左団次著『左団次芸談』一二八―一二九、一三九―一四〇頁。

座』に迎えられる。小山内薫と二代目市川左団次により結成された自由劇場は、明治四二（一九〇九）年初の公演として新築の洋式劇場、有楽座でイブセンの戯曲『ボルクマン』を披露した。その翌々年渋沢栄一を創立委員長として帝国劇場が落成し、自由劇場の公演は以後ここで行われる。やがて小山内は演劇視察のためヨーロッパ諸国を歴訪し、モスクワ芸術座でゴリキの『どん底』等に感銘を受けた。① 大正三年帝国劇場では芸術座の島村抱月演出、松井須磨子主演によってトルストイ原作『復活』が上演され、その主題歌『カチュシャ』が世を風靡する。一方帰国した小山内は同年やはり帝劇でゴリキの『夜の宿』（『どん底』）を演出するとともに、島村・松井に対抗して有楽座でアンドエーレフの象徴劇『星の世界』を有楽座で上演。自由劇場の公演は以後四年間中断し、大正八年に復活するも不評に終わった。この間に彼は大劇場の営利主義や興行の低俗化に違和感を募らせる。小山内の慨嘆「新劇復興のために」は大正六年より雑誌『新演芸』に連載され、商業演劇への失望と訣別が表明された。

震災前夜 商業演劇への失望と訣別（小山内薫「新劇復興のために」）

日本の「新しき芝居」よ。哀れな日本の「新しき芝居」よ。お前のこの頃の瘦せようはどうだ。お前この影の薄さはどうだ。お前はオイケンやベルグソンやタゴオルのように、やっぱり「一時の流行」であった

① 小山内富子『小山内薫―近代演劇を拓く』慶應義塾大学出版会、二〇〇五年。五一、八二―八四、

一〇五―一〇六、一二二―一二三、一二九頁。

のか。

お前が始めて外国からこの国へ渡って来た時、この国の所謂「有識者」はどんなにお前を歓迎したろう。どんなにお前を有難いものと思ったろう。そして、どんなにお前を無くではならぬものと思ったろう。

然るに、今日のお前はどうか。お前は僅かに「田舎廻り」に生きている。お前は辛くも浅草公園に生きている。そしてもう「有識者」とは何の関係もなくなってしまった。「有識者」の末流とも何の交渉もなくなってしまった。……

お前がほんとに莫迦にされ始めたのは、あの「カチュシヤの唄」からだ。『復活』は、お前にとって『復活』ではなかった。『復活』ではなく、『死滅』だった。「カチュシヤの唄」で当った『復活』――トルストイにはほんの僅しか関係のない『復活』――まるで黙阿弥の芝居を見るようなセンチメンタリズムの『復活』――あれから、お前の本当の姿は段々舞台の上に見られなくなった。お前は段々名前ばかりになった。そして、名前ばかりのお前がお前だとして、今までお前を見た事もない人達に喝采され出した。そして、今まで不完全なお前の内にも本当のお前を求めてやまなかった人達が、段々お前を遠ざかるようになってしまった。芸術座が「二元の道」を説き出したのも、丁度その頃だったろう。「二元の道」とは何の事だ。簡単に言えば、一方では神に仕えながら一方では人に仕える事だ。そう言うのが若しむづかしえれば、一方では金儲けをしながら、一方では芸術家になろうというのだ。即ち、少しは俗衆の媚びても、先ず金をうんと儲けた上で、それから損得を顧みない純粹な芸術を見せようというのだ。……

『復活』で味をしめた芸術座が二元の道を説き出してから、お前は本当にみじめな目を見始めたのだ。お前はやがて浅草の六区へ連れて行かれた。お前は大阪俄や活動写真と一緒に陳列された。そして、あの埃だらけな、外から見通しな野天のような舞台で、薄暗い醜い光の中で、臭い息と噓せるような烟の籠った空気の中で、耳も聾になりそうな騒がしい物音と人声の中で、八公熊公の前にお前の姿を晒さなければならなくなった。あたりが騒がしい為に、役者の声は段々高く叫ぶようになった。あたりが騒がしい為に、役者の目は段々大きく見張るようになった。役者は群衆の勢に負けまいとして、舞台の上で出来るだけ荒ばれた。哀れな日本の「新しい芝居」よ、かくしてお前は咽喉を割られたり、まなじりを割られたり、手足を抜けばどう引つ張られたりした。無慚に傷つけられたお前の魂は、やがて公園の池に投げ込まれてしまった。……

「新しい芝居」よ。決して失望してはいけない。決して落胆してはいけない。お前の本当に立つのは寧ろこれからだ。今までお前に追従して来た者は、みんな嘘の人間だ。今のような姿になったお前を見捨てないで、もう一遍これからお前を守り立てて行こうという人が、本当にお前の味方なのだ。①

築地小劇場の創立者土方与志は、伯爵土方久元を祖父とする。久元はかつて土佐藩勤王の志士であり、文久三年三条実美らの七卿落ちを護衛。やがて坂本龍馬等とともに薩長連合を支援し、幕府を大政奉還へと追い詰めた。維新後彼は男爵に列せられ、第一次伊藤博文内閣では農商務大臣と宮内大臣を歴任する。② その孫与志は幼く

① 小山内薫「新劇復興のために」『小山内薫演劇論集』未来社、一九六四年。第一巻、三五、三七―三八頁。)

② 渡辺修二郎著『評伝 松方正義・土方久元』同文社、一八九六年。一七一―一七五頁。

土方久元著『回天実記』東京通信社、一九〇〇年。四頁―

して父を喪くし、二十歳若さで爵位を相続する。学習院中等科に在学の頃からイプセンなどの戯曲を読み始め、帝国劇場で『ジュリアス・シーザー』の舞台にも接した。また、素人劇壇の友達座を同級生と組織し、みずからは舞台監督を担当する。以後帝国大学文学部に進学して、小石川の自邸に模型舞台研究所を設け、友達座によるメーテルリンク作『タンタジールの死』を渋谷福沢桃介邸の丸太小屋で披露。一九二〇年帝国劇場の公演記録には、ワグナーの楽劇『タンホイザー』星の歌巡礼の場』総指揮山田耕筰、合唱指揮近衛秀麿に加えて、演出土方与志と誌される。その翌年土方は山田耕筰の紹介で小山内薫を訪ね、弟子とされるよう懇請し、試練として明治座にて市川左團次一座の『俊寛』に舞台装置を施した。①

震災前夜 人生の煩悶とヨーロッパ留学（土方与志「灰色の築地小劇場」）

一九二〇年私は職業的演出者となるために、小山内先生の助手として徒弟的な修行をつむことになった。そして先生の戯曲『第一の世界』に、初めて演出を担当することが出来て、とにかく劇団にデヴィューした。

この頃は私生活の上では、いわゆる学爵と一緒に先代の遺していった三十余万円の借金の整理も一形つけ、其の結果数万円を浮かせ得たので、ほっとしたところだった。しかし、この時代にまきおこったデモクラシーの波は、私のようなものをいろいろ考えさせた。なお、周囲の特権階級の中にある横暴や虚偽や矛盾に對

① 土方与志「自伝」（『土方与志演劇論集 演出者の道』未来社、一九六九年。三九五―三九七、四〇一―四〇二、四〇六―四〇九頁。

しても人並みの不満を感じずにはいられなかったし、まだ（河原乞食）などの観念があって、私の選んだ道には相当の石ころがあった、

特権階級の一員として、また有産者としての不安や事績や、一九一八年頃からの「演劇における理想主義者」としての、当時の劇団に対する不満や、特に小山内先生のすすめによって初めて知った平沢計七氏の指導していた労働劇団に対する異常な感激等で、どうにもならないあせりを感じていた。

私は息苦しくもあり、面倒臭くもあり、誰に何ともなく腹だたくもあって、日本を離れようと考えた。その結果としてどこへというあてもなく、漠然と、しいて目的をつけられれば、優れた演劇を学ぶことの出来るヨーロッパのどこかの国に行こう、しかしいつまでということもはっきり考えずに、また出来たら家族も次第に呼び寄せて、移住してもいいつもりでさえた。一九二二年私は一人で外遊の途に上った。・・・

パリについた。エトワール凱旋門の近くのオテル・パンシヨンの北向きの屋根部屋におさまった。モスクワ芸術座のソヴィエト国外客演第一夜の『どん底』を見たのはその夜だった。私はこの夜の観劇およびその後毎夜芸術座の上演を見たことを今にして思えば、稀有の幸福であったと考えるが、またこの観劇は、ここに語ろうとする築地小劇場九年のためには決して幸福のものでなかったといわねばならない。私は『どん底』『桜の園』『ステパンチコフ村』『村の一日』等を連夜見つけた。これら旧ロシアの生活を描いた作品は、もちろんロシア語のわからなかった私が深く内容を理解することは不可能であったが、私に激しい観劇を与えてはくれなかった。『どん底』の上演も、なにか完成美というようなものは感じたが、ひどく平板なものに感じられた。・・・

当時パリの劇壇は非常に盛んであった。国立劇場のほかに多くの小劇場も、それぞれの特長をもって存在

を主張していた。私の最も多く訪れたのは、ジャック・コポアのヴィユ・コロンヴィエ座と、北欧の近代劇を多く演じるリュネ・ポーの創作劇場であった。私は暮から正月にかけて率直にすべての観劇の印象を小山内先生に報告した。

一九二三年一月ベルリン大學に演劇科が開かれると聞いたので、ルール占領、そしてさらにヨーロッパ戦争の再発の噂をよそに、フォッシュ將軍の軍隊と一緒の汽車でベルリンに着いた。・・・当時ベルリンは表現主義演劇の最盛期であった。私はゲオルグ・カイザーの世相的戯曲の上演や、またエルンスト・トラウ、カール・チアベック等の作品に興味を感じた。革命的演劇運動はまだはっきりと現れていなかった。エルウィン・ピスカールなどは場末の劇場で、トルストイの『闇の力』などを上演していた。①

貧しい母子家庭で育った山本安英は、内職に追われる母を幼いときから気遣い、やがて東京の伯父母に預けられて女学校に通った。医家である伯父は謹厳であったが、伯母の好意で踊りや長唄を稽古し、月刊『演芸画報』の耽読を楽しみにする。新聞広告で知った市川左団次の俳優養成所に応募し、小山内薫の面接を受けた。大地震の二年前、大正十二年暮に彼女は、小山内の戯曲『第一の世界』に抜擢され、帝国劇場において初舞台を踏む。この師走興行には土方与志が演出に加わり、市川左団次や市川猿之助らの共演で好評を博した。②

① 土方与志「灰色の築地小劇場」(『土方与志演劇論集 演出者の道』一一一―一二三頁)。

② 大山功著『近代日本戯曲史』近代戯曲史刊行会、一九六九年。第二卷(大正編)五五二―五五五頁。

震災前夜 帝劇初舞台まで (山本安英『新版 歩いてきた道』)

とりとめのない思い出は、もう私が小学校に通い始める頃、例の祖父はすでにいず、母と三人の弟と、やはり横浜の一隅に貧しい暮しの日々を送っている頃からはっきりとして来ます。共に寝起きする父というものが私にはありませんでした。父は時々気弱そうな美しい面だちに眼鏡ををかけ、長髪に琴の糸で織った被布で私の家へ現れ、おみやげの牛肉を自分で料理して私たちに食べさせては、すぐまたどこかへ行ってしまっただけの人でした。谷文晁の流れを汲む絵師で、それから茶の湯や生花を教えたというこの父が、母に對して使う「あなた」とか「そうです」とか、時には軽い調子ながら「ございます」というような言葉づかいを、子供心にも言葉がきれいというよりも何か遠慮勝ちなものに私が感じるのでした。

どうして別居しなければならなかったか、その複雑な入りわけを、いまだ私は母に聞くこともできずにいるのですが、父の方には私たちの生活を助けるだけのゆとりが全く無かったらしく、私の覚えている限り、母はいつも朝から晩まで四人の幼い子供のために、心臓の悪いからだを働きづめに働いていました。・・・ただ一つにすがりついていた「職業」というのは、父の紹介だったのでしよう、「はま」のえはがき屋で売っている外人向けの写真やガラス絵に彩色をする下請けの仕事でした。・・・それを私が幼いなりになんとか手伝いしようと思つて手を出すと、母はいつも厳しく私を叱りました。貧しくとも子供だけは卑屈にさせたくないというその母の気もちを察することができたのは、もちろんずっと後のことでしたが、その頃は叱られるのがわけもなく淋しくて、やっと願つて私と一番上の弟とに許されたただ一つの仕事は、えのぐを

洗って色のついたどんぶりの水を、日に何度か取りかえる仕事でした。・・・

小学校もだんだん上級になって来ると、母も少しずつ私に仕事をさせてくれるようになっていました。引っこみ思案のくせに負けん気だった私は、出来上った品ものをお店に届ける役を引きうけて、ふろしきを抱えては油の音のじゅうじゅうしている南京街を抜けてお店へ通いました。夕方などお腹をすかして、せまい南京街の裏通りのあちこちから流れて来る油の白い、肉の白いの中を、子供んがらもわびしい気持で歩いたものでした。・・・

芝居も幼い頃祖父や「ばあ」につれて行ってもらった以外は殆んど記憶がなく、ただうちの患者待合室におくため毎月とっていた『演芸画報』は、私の待ちきれない楽しみで、ずいぶんくりかえしよみつけたものでした。新しい劇というものは、まだ社会的にははっきりした地歩を持っていなかった時代ですし、思想的にも社会的にもものを見る見方が多くの人々の口の上るようになったのはそのしばらく後のことで、ですからこの頃私があこがれていた芝居の世界というものは、ただ漠然と「芝居の世界」として私の頭の中に画かれていたものにすぎませんでした。それともう一つは、前に書いたようにやはり私も何か職業をもって働きたいという気もちを持っていました。そのときの私自身の境遇は、そういうことを必ずしも必要としていなかったわけですが、横浜でいまでも二人の小さい弟を抱えて細々暮らしている実母の事を考えると、たまらない気もちだったのです。私は毎朝あけ方にそと家を抜け出して、赤坂の円通寺までお百度をふみに通いました。今考えると少々恥かしい気もちもありますが、ただただ何とかして自分の念願を通したいという一途なもので、別に何かを信仰するという気持ではむろんなかったのですが、それは自分でもかわいらしいと思う程ひた向きな気もちで、その折円通寺の尼さんから頂いたガラスの数珠を今でも大切に持っています。

何かの話にあるように、二一日目の満願の日、玄關を出ようとしたとたん、投げ込まれた新聞に私は、市川左団次さんが松竹をバックにして、現代劇女優養成所の生徒を募集する、という記事を発見しました。私は養母に無理をたのんで、父に内密でこの試験を受けたのです。

新富座の芝居茶屋（猿屋）の二階は、応募者で一ぱいになっていました。母親について行ってもらったのは私だけだったので、少々気まりの悪い思いもしましたが、この時の試験場で初めて小山内薫先生にお会いしたのです。そしていまだによく理由の判らないのですが、その中から選ばれた五名の一人に私は入る事ができました。・・・当時二四歳だった土方与志先生も、この養成所に関係されていて、実技を教えて下さいました。

初舞台は一九二一年十二月、帝劇で小山内先生作の『第一の世界』で、演出は「その頃は演出とよばずに舞台監督と言っていましたが一小山内、土方与志の共同になるものでした。当時まだ猿之助、長十郎さん方も一所だった左団次一座に、師走興行なので中車、小団次、松助、宗之助、寿三郎さん達も加わった大一座で、出しものは『増補信長記』『第一の世界』『奥州安達原』『鳥辺山心中』『拾遺太閤記』の順で五本立てでした。私は左団次さんの娘役で台詞も沢山あり、先生方の御苦勞は大へんだっただろうと、今になってよく判る気がします。下廻りの役者さんから「あたしなど永年芝居をやっているけど、まだろくに舞台上で旦那（左団次さんのこと）と口をきいた事がない、そんな役をふられたら、あしたしんでもいい」などとうらやましがられたものでしたが、左団次、松蔭さんを始め松助さんなど一座の方々は、本当によく面倒をみて下さいました。階級制度のきびしい歌舞伎の世界には珍しいことで、ここにもやはり一座の方々が、新しい芝居を開拓してゆこうとされた熱意がうかがわれる気がします。

この養成所はこの公演をやっただけで、どういう事情からか翌年の春までで終わってしまいました。それではまた家庭へかえることになり稽古ごとをつづけながら、時々小山内先生のお宅などにもうかがいつつ、またその間にはライオン児童齒科医院に勤めたりもしましたが、そこに起ったのがあの関東大震災だったのです。①

東山千栄子（本名渡辺せん）の祖先は下総佐倉藩の家老であって、父渡辺暢は高等法院院長を務め、貴族院議員に勅選された。兄弟姉妹の多い東山は、小学三年のとき後継ぎのない叔父寺尾亨のもとへ養女として引き取られる。ここでは社交界に出るべく早くから育てられ、華族女学校に入学するとともに、雙葉学園でフランス語をも学んだ。法学博士の養父寺尾は謹厳であって、花嫁となるべき娘に小説を読むことも、芝居を観ることも禁じたとされる。男女交際についても厳しく、花婿の候補者を養父母が選び、彼女は十八歳のとき、原合名会社モスクワ支店長の河野通久郎と結婚した。一時帰国した通久郎と京都での新婚旅行を済ませた後、明治四二年ウラジオストックを経て、シベリア鉄道で着任地へ到着する。折しもモスクワは帝政ロシアの末期、ロシア革命の前夜にあった。彼女の自伝には夫河野の演劇に対する深い理解やロシア革命による日本への退去も述べられる。②

① 山本安英著『新版 歩いてきた道』未来社、一九八七年。八一〇、一五一―一八頁。

② 東山千栄子著『私の歩んだ人生』産業能率短期大学出版部、一九七七年。四一五、九一一〇、一七―二〇頁。

震災前夜 モスクワでの生活と観劇（東山千栄子著『私の歩んだ人生』）

モスクワには主人がアパートを用意してくれました。五部屋ぐらいあり、六十歳になるフランスとポーランドの混血の家政婦のおばあさんと、若いロシア人の女中がおりました。おばあさんは主人から私を紹介されると、両手で私を抱き、両ほおとくちびると、三つキスしました。はじめての経験なので、私はビククリしてしまいました。

こうしてモスクワでの私の生活ははじまり、八年間をここで暮らすことになったのでございます。そのころのモスクワはやっと数カ月まえに日本総領事館が設けられたばかりで、日本人はその方たちを含めても、八人ぐらいしかおりませんでした。女性はそれから三年あとまで私ひとりでした。・・・

主人は文学や音楽を愛好しておりましたので、私に小説を読んで人生を知ること教え、またバレエやオペラやオペレッタに私を連れて行ってくれました。そのころにロシアは、帝政時代の爛熟期で、ましてモスクワは芸術の中心地でしたから、私は芸術に対する目をしだいに開かれて行きました。ポリシヨイ劇場ではじめて『白鳥の湖』を見たときの驚きと喜びは、いまでもわすれることができません。舞台の広さ、百人以上の踊り子たち、舞台装置のすばらしさ、音楽のうつくしき―明治の末期のころ、しかもお芝居やバレエなどをまったく知らない私だったのですから、私の驚きを想像していただけるでしょう。・・・

モスクワではじめて見たお芝居は『桜の園』でした。その夜は主人が旅行者のご婦人をご案内し、私もはじめて芸術座にまいりました。私はこの高名なお芝居に対して何の予備知識も持っておりませんでしたし、同行の方からそのころ日本で出版されていた瀬沼夏葉女史の翻訳本をみせられたのも、劇場へ行ってからの

ことd、それも幕間にただチラチラとページをめくったくらいだったのです。

しかしそういう私が、その『桜の園』にすっかり魅了されてしまったのです。脚本が傑出しているうえに、モスクワ芸術座の創立者のひとりであるコンスタンチン・スタニスラフスキーの演出でありますし、その演出者自身が兄ゲーエフの役で出演、作者チェーホフの未亡人オリガ・クニツペルが女主人公のラネーフスカヤ夫人に扮していたのですから、私ならずともそのすばらしい舞台から深い感銘を受けずにいられなかったことでしょう。

このとき私は、将来自分が俳優になるだろうか、『桜の園』をやるだろうかは夢想さえしていなかったのですが、それがこんなにひきつけられたというのは。あとになって考えてみると、後年私が俳優になる動機がこときあったような気がしますし、しかもその私が、やがてラネーフスカヤ夫人の役を三百回前後も演ずるようになったことの、いわば因縁のようにさえ思われます。……

のちの築地小劇場の創立者のお一人、小山内薫先生にはじめてお目にかかったのは大正元年でした。先生はモスクワ芸術座見学のためにおいでになり、それからドイツ、イギリス、フランスとお回りになって、シーズン・オフに再びモスクワに戻られ、しばらく滞在なさいましたが、このときは私の家でお宿をいたしました。先生と私の主人とは、以前に日本でお知り合いになっていたのです。

モスクワ芸術座では先生はちょうど画家が名画を模写するような敬虔な態度で、スタニスラフスキーの演出を克明にノートなさいました。先生はモスクワ芸術座で、まえにご自身が先代市川左団次さんたちと自由劇場で上演なされたことのあるゴリキの『夜の宿』をはじめとして、チェーホフの『桜の園』『三人姉妹』『伯父ワーニャ』などをごらんになりましたが、それらについてのノートが、のちに築地小劇場で生かされたのです。

しかし、ここに書いたすべての演目に、やがて私が出演することになるなどとは、よもや先生はお考えにならなかったでしょう。当時の私はまったく支店長夫人であり、人妻以外のなものでもなかったのですから。また小山内先生はスタニスラフスキーの家庭に招かれ、一座に俳優さんたちと親しく遊んだりなさったことを、楽しそうに話していらっしやいました。①

ロシア革命とモスクワからの退去（東山千栄子著『新劇女優』）

ひとつ主人に最も感謝しなければならないことがあります。それは窮屈な生立ちをしたために全く閉じられてしまっていた私の眼を、文学、音楽、演劇など、あらゆる芸術の世界へ開けてくれたことで、私の退屈であった人生は、どうやらそこから息づきはじめました。……

河野はその文学好きのまま法科を卒業して海外貿易に入りましたが、これは当時の世界の経済事情に感ずると共に、困難であった生立ちの経験からも、経済力の確立が第一、何ごともその上で考えたものでございましょう。原輸出商会に入って直きにリヨン支店詰めとなり、ずっと日本を離れて暮らしました。それで日本の文学の動きが次第にわかりにくくなったのでしょうか、その代り小説類の原書の入手は思うままでしたし、音楽にしても演劇にしても、日本では思いも及ばぬ本舞台のものに接し、初めは手探りから次第に自分

一個の鑑賞力を得て、殊にモスコーにいつてからは、丁度爛熟期の露西亞芸術に心ゆくまで親しみました。

やがてこの重苦しいまでの芸術的雰圍氣にあつたモスコーが、あの歴史上永遠に記録すべき革命の一撃によつて破壊される時が来しました。私共はその革命前に何も知らず、暫くの休暇をいただいて日本へ旅立ちました。そうして東京に帰つていて現場に居合わさなかつたのは幸か不幸かわかりませんが、私共の住居は丁度クレムリン宮殿と士官学校の間の処にございました。東京にいて号外で革命を知り、次の報道を待つても、今のようにラジオなどで迅速にわかる時代ではありません。重大な時に店を留守にしていたことですから、主人の心痛も一通りでなかつた次第です。幸いに店の人達も無事に脱出して帰り、その話で、瞬間に打込まれた銃火に焼けた店や住居の様子もわかりましたが、その人達は言いました。「支店長夫妻がいなかつたのは、幸いだつた。もしあの場所にいたならば生命の危険はもとより、何かを取出そうとして火の中に飛込んだかも知れない。」そういわれて私共も黙する外ありませんでした。

勿論家庭のことで見ても、主人が独身の時代の七年に、私が行つてからの八年を加えて、十五年の間に自然と出来ていた物一切、モスコーにあるのが私共の全部でしたから、故国の空に旅着の着のみ着のまま、これだけで振出しの無一物に戻つたという有様でした。間もなく領事館の引き上げとなり、主人が十五年苦心のあとも全く水泡に帰しました。主人の落胆するのも道理、実に主人のモスコーにおける信用は、もう充分にその後の仕事の堅実な成功を保証してあまりあるものであつたのです。そして主人の文学的氣質が何処よりも

よく合う露西亞であつたのでした。①

〔物語〕 関東大震災からの復興と築地小劇場の興起―小山内薫、土方与志、山本安英、東山千栄子―

第二節 大震災による新劇人の衝撃と覚醒 その一

関東大震災は首都の興行施設を壊滅させ、新劇に係わる人々やその留守宅を直撃した。発生の翌年六月に刊行された改造社編『大正大震災誌』には、演劇の分野に関して河竹繁俊の論稿「歌舞伎劇に及ぼせる影響」とともに、戯曲家中村吉蔵の執筆「破壊前後の新劇」が収録される。この寄稿において中村は劇壇震災の概要を誌しつつ、営利主義を排除した新劇復興の理念を提起している。

中村吉蔵「破壊前後の新劇」(改造社『大正大震災誌』)

大正の大震災は帝都のあらゆる文化機関を片っ端から破壊し去ったが、その中でも殆んど字義通り破壊し尽されたのは劇場である。劇場が直に演劇の成立に必要な欠くべからざる条件であり、機関である以上は、それが破壊し尽されたといふ事は、演劇が一時的に滅亡した事になる。・・・さし当たり、震災前に漸く勃興して来て我が国の在来の歌舞伎劇に挑戦を試みつつあった新劇の過程と、今回の破壊に基づくその当面の影響とを一瞥せう。

元来新劇とは旧劇、即ち徳川封建期の遺産たる在来の歌舞伎劇に対して、明治大正以後の新時代の精神を基調とし、西欧の近代劇の感化影響をその内容の上にも、又その形式の上にも著しく反応した新作戯曲の演出を意味するものであるのは云うまでもないが、西欧の近代劇の第一期が、主として自然主義乃至写実主義派の心理的解剖を重んずる傾向のものであって、従って小劇場形式の芸術であった如く、我が国に起った新劇運動も亦多くはさうした趨勢を追うて、小劇場形式の芸術を打建てるための努力が続けられて行った。ところが在来の歌舞伎劇の大規模な芸術様式に適合すべく作られた所謂大劇場の、あの龐大な建築はこの種の新劇にあまり適合しているとは云へない。唯洋風建築のプロセニウム舞台を持った帝国劇場と、さらに西洋の中小劇場の建築様式をそのまま移植して来た有楽座とだけが、新劇の演出に最も適合していた。殊に有楽座が独特の壇場だったと云ってもよく、事実にも新劇の発祥地となった記録を作っている。

此の有楽座の建築せられたのは明治四一年十二月で、在来の興行師の企業欲から離れて、華族富豪の有志者が新しい演芸を起さうとする多少の理想的計画のもとに成立ったものである。此の劇場に於て明治四二年十一月小山内薫と左団次の自由劇場が、森鷗外訳のイブセン劇『ボルクマン』を上演して、西洋近代劇を初めて我國の劇界に紹介し、従来の新劇のために第一の烽火を挙げたのは、当時の一センセイションであった。その後数回自由劇場はこの舞台を利用して数種の西洋近代劇を試演すると同時に、新進の劇作家、秋田雨雀、長田秀雄、吉井勇等の創作戯曲をも紹介した。・・・

有楽座に次いで、若しくは相並んで新劇の為に相当の功績を残したのは帝国劇場である。同座は明治四二年の創立でルネッサンスの建築様式に則り、白煉瓦の巨大な樓閣を外濠に近く聳立させて帝都の一大美観であったが、プロセニウム舞台を持っていただけに、他の日本式大劇場の、舞台の間口のムヤミにだだ広いのとは異つてその間口八間、奥行九間、プロセニアムの高さ四間、定員千六百三人であった。この舞台で文芸協会の『人形の家』が始めて公演せられ、松井須磨子が我が国最初の女優たる事を認められたのは明治四四

年十一月である。……今回の大震災はそうした記念の舞台を焼尽したが、外郭はそのままに残っており、近く再建される筈である。その意味では有楽座の喪失に比べれば、我々の遺憾の度は幸に少ないと云わねばならない。

又歌舞伎座は日本式大劇場の或意味で模範的のものであったが、震災の二年前に失火して全焼した。一、二の例外を除いて新劇には殆んど縁がないが、大劇場形式の新劇発生の一基点と見る時には、大正九年五月坪内逍遙の新史劇『名残の星月夜』を上演し、次いで七月に自分の創作した『井伊大老の死』を上演しているのは記憶すべきものであろう。新築中に起った震災の被害は比較的軽かったようであるが、こん度は舞台間口十六間の設計と聞いては、今後の大劇場形式新劇場が果たしてそれに適合する可能性を持ち得るのか否かは相当の疑問である。猶この他に明治座、本郷座、市村座に浅草の公演劇場、三国座等の中には新劇運動と因縁があるものもあり、またそれぞれに新劇が旧劇若しくは通俗劇と雑居して、そこに多少の分布地図を描いていたが、震災のために悉く灰燼に帰し去った。これは一時的にも旧劇に対する大打撃であるが、同時に新劇に対しても亦相当の損害であるのは勿論である。……

我国に於ける新劇の第一期、即ち近代劇運動時代に於ては、ひたすら純芸術的な新劇の爲めに途を拓かんとする熱意と期待とに燃えて、そこに全力的な戦いが戦われたのであるが、それが中途で所謂民衆化の傾向へ転回して行った為に、必然に商業主義化されて来て、やがて創作劇が普通の営利劇場へ迎えられるべく都合の善い段取が付いたと同時に、創作劇そのものの半面には不純分子が鼠入する動機が醸されて、近代劇運動の当初の理想的な出发点とは距離があり過ぎるといふ批難が一部から加えられているが、それも強ち無稽の言として斥ける事はできない。……新劇がそうして普通興行に割込んで行った結果、帝劇や有楽座は

暫く別として、日本式の大劇場の大舞台の上に、本来小劇場形式の新芸術が一時の間借り状態で、落着かない状態で雑居者の如く取扱われねばならなかったのは、敏感な鑑賞家の眼には一の醜態として映じたかも知れない。それだけならまだ宥されもするが、他の全く芸術のテンペラメントの異つてゐる歌舞伎劇などに混入して演出される点では、折角の新劇をして寄席興行の一余興扱いさせる遺憾がないとは云えなかった。その根源は即劇場の商業主義から来ていると云へば、それはたしかに誤りのない真理である。……

上演されつつあった新劇の内容、基調精神の問題に到つてはここで手軽に一掃的の論断は下されないが、その多くは自然主義乃至写実主義の範囲に止まり、若しくは一種の唯美主義に依拠していたと云つても大過はない。勿論近代劇運動の主潮の一はそこに関はっているが、今全世界の実生活の地盤を震撼しつつある最も現実的なブルジョア対プロレタリアの抗争から捲起された思想感情の激しい渦巻、その渦巻のためにやがて崩壊して行くとする錯覚的現代文化の運命、原始的に更生せんとして苦悶しつつある人間の魂の呻めき――そうした世界大戦以後の煉獄に投ぜられた人間の实生活図は、我国の既出の創作劇にはまだよく現われない。……

破壊し去られた劇場を出来るだけ原形のままに再建したい、即ち復旧したい、その外面も、その内容をそのまま破壊前の遺業の承継であらせ度いというのが、恐らく興行当事者たちの願望ではあろう。そしてそれは多少の歳月を経たら、或いは遂げられて行くであろう。しかし、在来の興行当事者たちの手に支配された営利主義の劇場、即ち資本主義の傀儡であった演劇全体が、再び原形のままに復旧される事は、決して民衆の爲に望ましい事ではない。又芸術の爲に願わしい事ではない。破壊前に新劇が漸く登達期に向つたのは事實であるが、前已に述べた如くそれが到底奇形的な、変態的な傾向から離脱する事が出来なかつた主要な原

因の大半は、資本主義の劇場組織の係縛から来ていることは明らかである。素より今回の破壊が資本主義そのものの破壊を意味せないで、却ってその回復の為に、より多く資本主義に依頼する一般形勢を助長するかも知れないし、少くとも劇場と資本主義との絶縁の如きはさし当り空想に過ぎないのは勿論であるが、一面においてその種の営利劇場以外に非営利的な、芸術劇場乃至民衆劇場が興起する好都合は正に到来したと云って善い。破壊後の今日は正にバラック劇場の建設の許されてある時代である。破壊前に数百万の建築費設備費を要した為に、大資本を擁せなくては到底手の付けられなかった新劇場の計画が今日ではその十分の一以下の費用で実行の可能性がある事になった。演劇をブルジョア階級の手から奪還して、一般民衆ものとするには、いまこそその時である。劇場を資本主義の係縛から解放して、芸術本来の面目を自由に發揮せしむる機会が、今日を措いて他にない。この使命のために起たうとする有志の公共団体乃至公共機関が、漸く活動を始めつつある形勢も一部には見えている。我々はその活動の現実化を希望するに止まらない。今こそそうした活動の起されるのが、当然であり過ぎると思っている。

破壊前の舞台上に演出されつつあった新劇の多くは、世界大戦前記の西洋の近代劇の脈を追うたもので、大戦後期のものでない事は已に一言した。素より芸術は個性的のものであって、十年、二十年の歳月の経過、乃至時勢の変遷の為に動揺されるべきものではないというのは一面の真理たるを失はない。しかし、同時に卓越した個性の天才が生んだ芸術も、時間的過程が常にこれを古典化しつつある事も亦他面の真理である。世界大戦が人間の心理の上に、また社会の組織の上に一大激動を与え、一大覚醒を促した点ではまさに画時代的であった。今回の大震災は自然の革命であって、人為の革命ではないから、世界大戦に直面した西欧の民衆の受けた程の深遠な感銘を我国の民衆に与え得たとは云えないが、少くとも世界大戦後の西欧の民衆の

動揺し混乱して、その渾沌の底から一縷の光明を望んである心理の一端に、触れて行く鍵は慥かに我々の手にも握られたと云って善い。世界の煉獄の苦は日本的にも体験されたに違いない。この体験事実が芸術殊に新劇の上に反映するのは当然期待されなければならない。……

破壊前の新劇の基調には、兎角ブルジョア趣味がこびり付いて離れなかった。少なくともブチ・ブルジョアの殻が破れなかった。今回の震災は帝都の多くの人々が、その実生活上に被っていたブルジョアの殻を一挙に破砕し去った。ブルジョアもプロレタリアも一時的に焦土の地平に立って、一時一挙に原始人化した。所謂文化の仮面が落ちて、荒削りの生きいきした人間に還元された。その間に一面相互扶助の神的な美しい天性が發揮されると同時に、他面同族相食む獸的な醜い本性も亦暴露された。一度は坩堝に投ぜられて人間の地金が露出したのである。この前代未聞の、若くは一生に空前の体験が芸術、殊に新劇の上に投影したら、少なくとも在来のブチ・ブルジョアの殻を破ったものが、発生して来なければならない。それは荒削りの野生に満ちた芸術か、若しくは人間愛憐のユーモア芸術か、或いはその他の一特色あるものか、何んにせよ、破壊前のものとは、その風格の相違した新劇が、この体験の中から生み出されて善い筈だと思ふ。

なお破壊前から常に求められていた規模の宏い一大悲壯劇が、大民衆を抱擁する新芸術として出現せなければならぬのは勿論である。小劇場形式の新劇以外に大劇場形式の新劇が続々創作され、また演出される事が、必要であるのは云うまでもない。①

島根県で旅館の息子として生まれた中村吉蔵は、公証人の書生や為替貯金管理所の書記を勤めた。苦学しつつ彼は早くから数々の小説を雑誌に投稿し入選する。やがて上京して広津和郎のもとに寄寓し、早稲田大学に入学。その後欧米での留学と遍歴によって演劇への関心を深め、帰国後島村抱月の主宰する芸術座に参加する。大正三年から大正八年にかけて彼の戯曲、『飯』や『剃刀』が帝国劇場で松井須磨子を主役として公演された。大正九年歌舞伎座で上演された中村の脚本、市川左団次出演の『井伊大老の死』も評判になる。奇しくも大震災の前年彼は戯曲『地震』を発表し、尾上菊五郎一座によって市村座で初演されていた。①

帝国劇場における自由劇場の公演が杜絶したあとも、市川左団次は活躍を続け、大正九年には新富座で岡鬼太郎作『今様薩摩歌』を、また歌舞伎座で中村吉蔵作『井伊大老の死』に出演した。さらに大地震の前年京都南座での公演に先立って、十月一日洛東知恩院の山門前で野外劇、松居松葉作『織田信信長』が挙行された。松竹大谷社長の後援により左団次が主役を演じ、祇園花街の少女五十余名が稚児姿で舞い、小山内薫も演出に参加した。無料で提供されたこの野外劇には観衆十万人が押し寄せたとされる。② 『左団次芸談』には彼の震災記録も含まれる。

① 大山功著『近代日本戯曲史』第二卷（大正編）四八〇―四八一、四八五―四九〇頁。

『新人物立志伝―苦学力行』大日本雄弁会、一九二二年。五四―五六頁。

② 市川左団次著『左団次芸談』一五二―一五六頁。

大地震の衝撃と避難（市川左団次著『左団次芸談』）

（大正）十二年は六月の明治座を了えてから、九月は歌舞伎座に出演することとなった。

其九月一日である。午後一時から岡本綺堂氏作『鬼薊清吉』の本読があるので、まだ家にあると午前十一時五八分、関東一帯を襲ったあの大地震である。土蔵の瓦が一、二枚落ちて、塀が少し倒れたきりで、大したこともないので、落ちついていて、そのうち下町に異様な光を発する火の手が見えた。（猫いらず）の本舗だと云う。間も無く猿楽町の方から火が上ってきたと云う騒ぎ。大丈夫だと思っていたものの、女達がいたので、とにかく立退くようにと云い渡して、弟子達に荷物を頼み、妻の姉の上野の家に引上げた。私の家の辺は被害が殆ど無かったので近所の人はまだ立退く気配も無く、私の家の者が一番早かったようである。

すると二日の晩になって、上野の山に火が廻ってきたというので、山の上は大騒乱を極めた。これは避難の人で山が一杯なので、後からきた人達が仕方なく、日暮里の方に続々と行くのを、山から逃げて行くものと誤っての混乱と後になって知れたが、私達も線路を伝って、滝野川の知人の家に移った。するとまた、朝鮮人云々の噂が近隣を騒したので、其知人の妹の家が東中野にあって、田舎の物持の娘でそこならば米も豊富に得られると云うので、自動車を一台見つけて、東中野の某家に落着いた。ところが先方は夫婦暮し、こちらは同勢七、八人で、なかなか米が足りないらしいのが解ってきて、気の毒になったので、私の車夫に米を探させて買ってこさせなどしているうちに、牛乳配達が中野野方村に家を見つけてきてくれたので、七日

にそこへ引移った。また建てたばかりの家で、障子も張ってなかったが、結局其方が涼しいと云って、一ヵ月もそこに起き伏しをしていた。

東京で芝居を演ることは、まだ一年位は覚つかないと思っていたので、当分はそこに籠るつもりでいたところへ、大阪から話があったが、それは断ると今度はたしか十月の二日に京都から話があったので、十一月には京都で演らうということになった。

ちょうど小山内君は大阪に引移るといので、一緒に行くことにして、東海道線はまだ復旧されていなかったたので、上野から十月二日に発った。汽車の中は大混雑で一睡も出来ず、おまけに親不知のあたりで、夜二時頃に半時間近くも停車してしまったので、小山内君と車外に出て、名月の荒磯を歩きながら、灰燼と化した東京のことを語りあった。・・・

震災では貴重な書籍や書画骨董を灰にしてしまったが、立退く時には自分のものだけが焼けるので、また直ぐ集るとい気がしていた。岡本綺堂氏も震災後一時麻布に住まわれていたが、其話をするとやはり同じような気持であったと語られた。中野に落着いてからは、ことによると蔵だけは残っていて、其中のものは無事かも知れぬという気もしていたが、十日程経って行ってみると、やはり跡形もなかった。①

演劇界の伝統と傾向に失望した小山内薫は、その後松竹キネマの研究所所長として招かれ、わが国初の劇映画

① 市川左団次著『左団次芸談』一五六―一五九頁。

『路上の靈魂』を軽井沢で撮影した。しかし、大正十二年の春すべての興行と劇団から離れ、書齋での演劇研究に専念する。新劇再生の悲願をなお秘めて、ときを待つ小山内の心境を震災の惨禍は一層沈痛にした。

大地震直後の苦衷（小山内薫「築地小劇場建設まで」）

私が昨年三月、松竹と手を切った時―それは私が日本の営利的劇場の総てに対して望みを絶った時でした。私は再び日本に於ける営利的の劇場には如何なる関係に於いてもは行って行くまいと決意しました。

当時の私にとって「前途」はありませんでした。目の前は闇でした。私は唯書いて、僅に生活し、僅に自分を慰めました。

その内に私の思想の上に或黎明が来ました。それは独逸へ行っている土方が帰って来たら、二人で演劇学校を興すことでした。勿論この考えは余程前から私にありました。営利的劇場と全く絶縁するに及んで、もうこれより外に自分の行くべき路はないと思うようになったのです。

物質上の根拠があったのでもありません。組織上の同志があったのでもありません。私は唯ぼんやり併し強い希望を持って―土方が帰って来たら、二人でそれを始めようと思っていたのです。そしてそれを楽しんでいました。その考えは誰にも知られずに私自身を慰め且つ励ましていました。

大地震が来ました―その時、私は家族を挙げて地方にいました―東京の殆んど総ての劇場は焼け亡びてしまいました。私の心の中で半年前に亡びてしまっていた総ての劇場は目に見ゆる形の上でも亡びてしまったのです。

併し総ての劇場が亡びると共に私自身の希望も亡びてしまひました。演劇学校の建設などはもう当分思いもつかない事になってしまひました。少くとも十年のギャップが私の目の前に口を開いたのです。私にはもう自分の生きてゐる間に自分の進まうとする道が一步でも歩けるか、それが疑わしくなつて来ました。第二の絶望が来たのです。しかもその絶望は私にとつて最後の絶望でした。

私はその儘地方にいました。その儘東京へ帰りませんでした。私の友人は私が見捨てたと云つて私を罵りました。だが私はその時東京を見捨てたものではありません。私が若し東京を見捨てたとすれば、もう半年前に見捨てていたのです。私はもう半年前に東京の劇団を離れてゐました。東京の劇団はもう半年前に私を追い出していたのです。東京の劇団はもう私を必要としていなかったのです。もう私は何処にしようか、好い体になつていたのでした。

私は何を罵られても黙つてじつとしていました。実際それについて一言の弁明もしませんでした。一言一句も書きませんでした。そして死よりも暗い絶望を抱きながら、黙つて静に毀れた東京を見ていました。震災後の東京の劇壇―すべてが亡びすべてが新しく生まれ来なければならぬ劇壇―そこから生まれて来たものは果してなんでしょう。

営利劇場の基礎もない競争的宣伝、劇場の全滅を好い事にして、そここに首をもたげた忙しげな新劇団、バラック俳優、バラック演技、バラック興行師、

私は愈絶望しました。もうどうにも救いようがないと思ひました。ひねくれた自分の根性かも知れません。徒らな反抗的精神からかも知れません。私は唯読んで書こうと思ひました。書いて読もうと思ひました。如何に叛かれても憎む事の出来ない演劇を、せまい書齋の内に、それよりも狭い自分自身の頭腦の内に作り上げようと思ひました。①

大地震勃発のとき小山内薫は、家族とともに関西に滞在し、東京四谷の留守宅も被災を免れた。ひととき帰宅して、彼は東京の惨禍を見詰め、大阪への転居を決意する。次男宏の嫁小山内富子による評伝では、留守宅の無事と大阪での暮らしも語られる。

大阪への小山内転居（小山内富子『小山内薫―近代演劇を拓く』）

大震災のその夏、薫の三人の子供と登女子は、薫の大阪での仕事に便乗して夏季休暇の避暑地を神戸の六甲に選んでいた。四谷の留守宅には書生と女中と姉の礼子が残っていた。三男の喬は小学校の一年生で次男宏も、長男徹もまだ小学生であった。二学期は九月一日から始まる。東京へ帰る準備も整った前日の八月三十一日、三男の喬が突然腹痛を訴えたので、帰京は延期されることになった。ここへ東京周辺は地震で阿鼻叫喚の巷と化したのであった。「あのとき喬の腹痛という偶然がなかったら、私たちもどうなっていたかわかりません」と登女子は災難を免れたそのときの幸運をよく私との話題にした。……

薫は家族をそのまま大阪に残して、単身東京へ戻った。一般人の上京は制限されていた。薫は新聞関係の報道員の身分証明書を持参しての一時帰郷であった。

四谷南町の留守宅は崩壊からも火災からも免れ、書籍類も無事であったし、病弱な姉礼子をはじめ書生や女中も無事だったことを薫は何より喜んだ。東京周辺は一面の焼け野が原で、冷静さを失った巷には流言飛語が飛び交い、治安も悪く騒然としていた。薫は家族を大阪に足止めさせておき、これを機会にいよいよ書齋に籠る決意を固め、家族も大阪へ引っ越しさせることにしたのだった。

天王寺悲殿院町の家への引越し、そこはプラトン社中山社長の持ち家で、明治情緒の漂う大きな洋館だった。部屋数もたくさんあったので、小山内家一家が広い二階に住み、階下には妹の岡田八千代と松竹の女優さん親子と、薫の仕事の助手をしていた若き日の川口松太郎が、一部屋ずつを占めて、四世帯が二か所の台所を使って暮らすことになった。①

土方与志の夫人梅子は大正初期の日銀総裁、三島弥太郎子爵の次女である。ヨーロッパに滞在する土方与志の留守宅は被災を免れるが、小石川林町の豪邸へは親族のみならず、近隣の住民百余名が避難した。のちに築地小劇場の運営にも尽力する梅子は、罹災者のため炊き出しや買いものに忙殺される。大地震から派生した危険、朝鮮人騒ぎや亀戸事件をも彼女は切実に感じた。

大地震の被災と救助（『土方梅子自伝』）

① 小山内富子著『小山内薫―近代演劇を拓く』慶応大学出版部、二〇〇五年。一八三―一八五頁。

与志が発した翌年の秋に私は敬太を連れてフランスへ旅立つことになりました。母はまたあとから来る予定でした。九段の学校も夏休みまで仕事をやめ、船の切符も入手し、すべて準備を完了して九月十日の乗船を待つばかりになりました。しかし、突然この出発は中止せざるを得なくなりました。九月一日におこった関東大震災によって、東京一帯が大混乱に落ち入ったため渡欧どころではなくなったのです。

小石川の家は倒壊や火事の被害はありませんでしたが、その大きな地震は、ふるえ上がるようなこわさでした。家の中には、何時またゆりかえしが起って家がたおれるかもしれないので庭に難を避け、木と木の間に蚊帳を吊って、その中に入っておりました。満二歳の誕生日を間近かにひかえた敬太も、無事でほっとしましたが、家の中にあるおもちやを欲しがって泣くのには閉口しました。第一のゆれは正午頃でしたが、夕方になるとあちこちで火の手の上るなかを、姑の実家加藤家や、叔母の嫁ぎ先の吉川家（もと長州岩国藩主）の人たちが、高台にある私たちの家を頼って逃げて来ました。近所の方々も庭の広い私の家へ避難して来られたので、日頃は家族数の少い土方の家も、この時は百人以上もの人たちが埋まりました……

わが家では百人以上の罹災者に、炊き出しをしなくてはなりません。主婦として私はその中止になって働きました。大急ぎで近所の米屋さんから俵のまま米をとりよせ、おにぎりを作るとともに、祖父母をはじめ、親戚の人たちのおかずも用意しなければなりません。人力車に乗って、本郷にあった当時としては珍しいカンヅメやハムなどを売っている食品店まで買い出しにでかけました。

しかし、その途中が大変でした。道路には焼け出された人たちがあふれ、人力車に乗っている私に比べてなります。「ばかやろうー」「車に乗りやがってなんだい」「コンチクショオ―着物着て、すますてやがる、非常時だぞ！」

道端のあちこちの家もこわれたり、焼くすぶったりしています。引き返したいと思いますが、主婦として大勢の避難して来た人たちの食事を用意しなければならない、今は自分にとってそれが一番大切な役目だと考え、決心して罵声を浴びながら小石川と本郷を往復しました。片腿をそのまま燻製にした大きなハムやカンヅメをたくさん買いこんで人力車に乗せ、小石川の家へたどりつきましたが、あの時のことを考えると、今でも苦しくなります。

地震や火災が一応収まったと思う間もなく、こんどは暴動が起るとの噂が立ちました。社会主義者や労働者、朝鮮人が火を放つとか、井戸に毒を投げ入れるとか云われ、軍隊がでたり、町の人たちが組織した自警団や、右翼団体が鉄砲や刃物、竹槍などを持って警戒にあたり、ものものしい状態になりました。

大きい家に住んでいる者はうらまれて、暴徒に襲撃されるとの噂も立ちました。私どもの家は爆弾をしかけられるかもしれないと注意され、緊張しました。しかし、これは結局デマで、実際に殺されたのは、労働者や朝鮮人、社会主義者でした。・・・与志はこの時、大切な演劇上の先輩を失ってしまいました。ヨーロッパに旅立つ前に、強い感動を受けた〈労働劇団〉の主宰者平沢計七氏はこの時、白色テロルのために殺されてしまったのです。大震災の時、平沢さんは純労働者組合の組合長でしたが、組合事務所があった大島町で自衛団をつくり夜警をしていました。三日夜の十時頃、事務所へ帰ったところを制服巡査にとらえられ、亀戸署へ連行されて、そのまま消息が絶えました。

多くの社会主義者、労働者、朝鮮人が警察や軍隊を中心とするテロルや自警団の暴力に殺されましたが、当時は真相を知らされませんでした。平沢さんもその夜亀戸署内で習志野第十三連隊の兵隊によって銃殺されたと、後にあきらかにされております。平沢計七氏と与志は直接の交際はないままに、平沢氏の虐殺とな

ってしまったのですが、与志の演劇の道にとって平沢氏は忘れ得ない足跡を残した方で、その方を警察や軍のテロルに奪われたことは、与志のその後の人生にも影響を与えたように思います。①

他方ベルリンに留学中の土方与志は、九月二日新聞報道で大地震を知った。その一カ月後復興しつつある祖国への復帰を決意し、モスクワを経てシベリア鉄道で大陸を横断する。途上ロシア革命七年後の首都では、新たなソビエト演劇にも接した。小山内薫と約束した劇団創立の構想を練り始めるのは、この旅路においてである。

大地震直後の祖国復帰（土方与志『演出者の道』）

一九二三年九月二日朝早くベルリンのホテルの一室に眠っていた私は、一枚の新聞を持って入って来たボーイに起こされた。ボーイは同情というよりも悔みに近い表情をして、持って来た新聞を渡した。いうまでもなくそこには前日の関東大震災のニュースが紙面をうずめていた。そこでは日本という島が太平洋に沈んでしまったかのように大げさに報ぜられていた。半年以上ヨーロッパ各地を演劇巡礼していた私はまず途方にくれた。

ちょうど一カ月目に、このまま勉強を続けようかどうかどうしようか思いなやんでいる私のところへ、二通の手紙が舞い込んだ。その一つは親戚の一人からので、震災によって東京の劇場がほとんど潰滅してしまった。

だからそれ等の復興がなるまで、ゆっくりそっちで勉強している、と書いてあった。他の一通は数年来左団次一座で親交を結んでいた河原崎長十郎からの手紙だった。彼はくわしく東京の劇場や劇団の消息を報告してくれた。「歌舞伎座の鉄骨、灼けて鉛の如く」等という名文もまぎっていた。そして最後には、一日も早く帰って来て、東京の復興をいっしょにやろうというような事で結んであった。そこで私は、この二つの手紙を前に置いて迷ったが、結局河原崎の手紙に従って故郷―東京の演劇の復興に参加しようと決意した。

もうその時は日本の新聞等も手に入れる事が出来て、沢田正二郎氏が日比谷公園で野外劇を演じ、荒廢の中の市民の圧倒的な喜びとなったというような事も知ったし、また今まで色々な法律や条令で窮屈に縛られていた劇場建築に対する制約が緩和されて、バラック建ての劇場も許可される事も知った。そこで私がヨーロッパに出発する時に、小山内薫先生と帰国後は演劇研究機関を二人で作ろうという約束を思い出し、それをさらに拡大して、まず劇場を持った演劇・劇団活動を始めようと考えた。

まだ国交も開けていなかったソビエト同盟政府の、大震災をうけた日本の国民への同情と好意によって、幸い在外の日本人を最も帰国のための近道であるシベリア鉄道通過を特別に許可するという措置が取られた。私もこの特典を帰国の方法として選んだ。

第一次世界大戦終結、十月革命からわずかに数年後であり、近道といってもベルリンから日本まで一ヵ月もかかった。その途中シベリア鉄道に乗りつぐためには一週間もモスクワに滞在しなければならなかった。これはしかし、私にとってたいへん有難い事で、その間新しいソビエトの演劇に、また社会やソビエト人の生活に接する事が出来た。

この一ヵ月の旅行中、私はバラック劇場の設計や劇場の座組等に関して様々な想像を楽しみ、一応成案を作った。十二月の終わりに私はようやく神戸に着いた。その翌日すぐに大阪に住んでおられた小山内先生を尋ね、帰国決意以来の私の構想を話した。①

帝国劇場で初舞台を踏みながら、ふたたび家業に戻った山本安英は、横浜で焼け出された実母と東京の山の手で文房具店を開く。その商売を実際には安江が担い、仕入れのため高円寺から浅草の間屋街へも頻繁に出かけた。小山内薫から呼ばれ、築地小劇場の創建に参じるのは、大地震の翌年夏である。

大地震直後の家業専念（山本安英『新版 歩いてきた道』）

大正という時代も末近くに起って、数日の間に東京の文化を焼きつくしてしまったこの大事件は、私一人の生涯にとっても、また意味深いものだったのです。日本の新劇のある意味では出発点である築地小劇場が起ったのはこの焼け跡からであり、そしてしあわせにも私はその運動に最初から加えて頂くことができたのでした。

その前に一寸私個人のことを申しますと、地震の時実母は二人の弟を連れて、東京の私の家へ遊びに来ていました。そして私の家は幸い災害をまぬがれましたけれども、実母達の横浜の家は、その貧しい家財もろともに一切が灰になってしまい、こうして母と弟達はまた新しい生活苦に直面しなければなりませんでした。

母たちは養父の厚意から高円寺の駅のそばに小さな家を借りて、今度はささやかな文房具の店を出すようになりました。うちが近くなったので、私はしばしばこの高円寺の家を訪れ、時には養家の許しを得て数日泊まりこむようなことさえありました。弟たちは学校へ通っており、母は病身なので、結局私が店を引き受けたいような気もちになって、一所けんめいに頭をしばって窓の飾りを工夫したり、商品の仕入れをしたりしました。私は小さい弟の手を引っぱっては浅草の方へ出かけ、あちこちと問屋さんの店を廻って、その年頃なりにせい一ぱい頭をひねるながら、鉛筆だとか帳面だとか筆箱だとかゴム消しだとか、そんなものを自分一人の率領で仕入れては、小さな体に大きなふろしきを背負って高円寺の家はかえってくるのでした。愛読していた樋口一葉に、私自身がなったような気になりすましていたこともあったようです。筑地小劇場の話が起って、小山内、土方両先生から私がよばれたのは、このようにして日々を送っている時でした。①

大震災の衝撃を契機に人生の劇的な転換に向かうのは、当時三三歳の東山千栄子である。彼女の夫河野通一郎が属する原合名会社は、富岡製糸場等を傘下とする横浜の絹物輸出業であった。ロシアから撤退したあとも、同社は発展を続け、河野はさらにニューヨークやリヨンの支店へと赴任する。他方千枝子は苦勞の多い海外生活を自重し、以後は日本の留守宅でながく生活した。子どもを持たぬ富裕な奥様として、種々の趣味にも手を伸べながら、無為と倦怠を感じる日々と自伝では回顧される。神奈川における紡績産業の壊滅をはじめ、関東一帯の惨

① 山本安英著『新版 歩いてきた道』一九二〇頁。

禍に直面して、彼女は文明や世事の空しさに慄然とし、この世で生きる意義を懸命に考え始める。

帰国後の生活と日々の無為（東山千栄子著『新劇女優』）

ロシアの大正六年に日本へ帰って、それからここまでの六、七年間何をしてきたかということになりますが、実はこの六、七年間は私にとって全くの空白であったような気がしております。それも自分の性格から来る一つの悲劇ともいいますように、何事もなくて大変苦しかった時代です。主人は永年築いた働き場所を失って失意の中にあるといっても、やがて仏蘭西に行き、アメリカに行き、また静養のため帰国して本店詰めでおります時でも、文学的な持前と共にいつも青年のような強い研究心で、身分や年齢にかかわらず、大學に行つて学生の中に交つて講義を聴くことさえも出来る、そういう風でけつして退屈することなく、従つて時の動きのよく解る人としていつも重用されておりました。それで商人というよりも書齋人的な風格がありました。そういう理解の中にありながら何故か私は、なすことのなくて日を暮らしているが気にしていません。……

モスコで全部を失ったといつても、日本に帰って住む家に困るのでもなければ、明日の生活に心を碎くのもありません。女中が何人もいて、子供のない家庭の仕事は、めいめいの分担がらくに済みますし、これは主人について外国に行つて暮したとしても同じこと、私はいよいよ平凡な有閑夫人で眠り込む外なかつただろうと思われまふ。とにかく仏蘭西へもアメリカへも主人は一人で行き、私は日本に残っていました。もしも無理に一緒に暮したとしたら、私の剛情が目立ち、主人のかんしゃくがつり、原因という程のもの

はなくていて、どちらとも面白くない、一般に夫婦のこういう時期のことを倦怠期といっていますが、二人が一致して打込む仕事のない悲哀、殊に一方がまるで手あきでいる状態では、余計に空虚が目立つのでした。こんな風で表面は一応調うた生活をしながら、過ぎて行く月日をとらえる術もなく暮らしているところへあの大震災が見舞いました。下町の住居ではありませんから、直ぐに戸外にのがれて、身命に及ぶような被害は受けませんでしたけれども、瞬間に行われた帝都の大破壊の前に、私は初めて長い眠りの眼をさまされました。①

震災の衝撃と人生の転換 (東山千栄子著『私の歩んだ人生』)

日本に帰ってから、主人はリヨンやニューヨークなど海外の勤務がやはり多かったのですが、私の方ほうも外国生活がいやになり、日本の留守宅に残って、当時の流行語でいう有閑夫人の毎日を送っておりまして。とにかく退屈でたまりませんので、その倦怠と無為とをまぎらわすために、いろいろなおけいごとをしてみました。しかしどんなに精を出してみたところで、どれもこれも興味以上に出ないことを、私は自覚せざるをえませんでした。

そこへ来たのが、大正十二年九月一日の関東大震災でした。思いもかけなかったこの突発的な天災で多数の人命があっけなく奪われ、家や施設が灰燼に帰してしまいました。その悲惨な現実と直面して、私は人間とはなんとほかないものだろうということをつくづく感じさせられました。そして、自分を省みたとき

① 東山千栄子著『新劇女優』五二―五四頁。

に、愕然としました。

私はいったい何だったのでしょう？ ただ生まれてきたから生きているというだけで、これではうじ虫の命と同じだと思いました。私のこれまでの生活は、あってもなくてもいいような、希望も理想もない、ほうとうにむだな、くだらない生活だったので。子供ひとりない私は、子供を育て上げるという、大切な母親の義務を果たすこともできません。河野の家の両親もすでに夜を去っていて、お世話をしてあげる人もおりません。生活費をかせぐこともなく。ただ主人に食べさせてもらっているのです。

自活できない、無力な女の生き方に私は疑問をいだきました。そして、なんとか勉強して、独立できるだけの教養を身につけねばならない、そこからほんとうの私が始まるのだと考えました。

私はそう決心してまず本を読みはじめました。それはいわが手当りしだいの、秩序のない乱読でしたが、とにかくこうして私は、なにかをつかまなければならないと決意したのでした。①

① 東山千栄子著『私の歩んだ人生』二九―三〇頁。

第三節 大震災による新劇人の衝撃と覚醒 その二

関東大震災に係わる新劇人の記録は、ほかにも若干見出されるが、とくに悲惨な運命に突き落されたのは、小山内薫の師弟平沢計七である。鉄鋼所の工員であった平沢は、大島・亀戸における労働組合活動家であるとともに、プロレタリア演劇の先駆とされる〈労働劇団〉を組織していた。「新民衆劇の萌芽とも云うべき」と中村吉蔵は大正十年の時評に下町の探訪を書く。「一風変わった芝居の催しを見た。場所は深川の錦糸堀から五の端へ出た市外大島町の五の橋館という寄席である。三、四百人位入れる小劇場程度の建物で、舞台は四、五間の幅しかないが、そこを利用して労働者出身の文筆である人が、労働問題を取扱った脚本を作り、旅廻りの少数の俳優を相手に、作者自身も登場してそれを上演した。付近は工場労働者が群居しているのだから、彼等は続々その奇席へつめかけて席は忽ち満員となつて了う。舞台上に展開する劇は、芸の巧拙は兎も角、直に観客たる労働者の心臓にまで高い鼓動を伝える題材なので、彼等は熱をもつてそれに共鳴して行く。そこに他の劇場では見られない生きた光景があつた。」①

平沢計七が命を断たれた一連の人災は、関東大震災に派生した亀戸事件としていまに伝えられる。大地震翌々

① 中村吉蔵著『現代演劇論』豊国社、一九四二年。八六一―八七頁。

日の夜半、平沢は数名の警官に呼び出され、大島町の自宅より警察署へと連行された。同じ頃亀戸では南葛労働会の活動家六名が検束され、いずれも生死不明となる。十月十日警視庁は亀戸警察署における彼らの殺害を認め、新聞各紙でも報じられた。① まもなく労働総同盟友愛会の依頼により、弁護士山崎今朝弥らの自由法曹団が事件の調査に着手する。犠牲者の家族や近隣を対象に、かくして作成された聴取書二四件の第一は、平沢の遭難をめぐる知人の陳述である。

平沢計七の検束と殺害（『自由法曹団聴取書』）

聴取書 第一

府下大島町三丁目二百二三番地

八島京一 二九才

一、自分は一日の地震の日に焼出され小松川の方面に逃げましたが、二日に雨が降り野宿が出来ませんので大島の方へ行きたる処途中で平沢君の細君に逢いました処自分の家に来て居れと云われたので平沢君の処へ行きました。此時は午後三時頃でした。而して平沢君は翌日正岡君の処へ倒潰家屋片付の手伝に行き、夕

① 藤田富士男・大和田茂著『評伝平沢計七』恒文社、一六八一―一七五頁。

拙稿『紡績工場の労資と女工の被災記録―産業革命先端への震災直撃(続)』三七―四一、九五―九九頁。

方帰って暫くすると夜警に行くと言い出て行き九時か十時頃と思う頃帰って来ました。暫く休んで居ると正服巡査が五六人来て平沢君に、まことに濟まんが警察まで一寸来て呉れと云い、平沢君も「はい」と云いおとなしく出て行きました。

そして夫れ切り帰りませんから細君が心配するし、自分も心配だから五日の正午頃手拭紙等を持ち警察署へ差入に行きました。而して亀戸署の高木高等係に逢い差入れを托したる処、平沢君は三日晩に帰したと云いますから自分は其時平沢君はもう殺されたものと思つて帰つて来ました。

二、其扱は、四日の朝三四人の巡査が荷車に石油と薪を積み引き行くに逢い、其中の一人の顔馴染の某正一と云う巡査に其薪及石油は何にするかとききたる処、外国人が亀戸管内に視察に来るので、其死骸三百二十人を焼くので昨夜は徹夜した。朝鮮人ばかりでなく主義者も八人殺されたと云うて居りました。夫れで平沢君も居るのではないかと、巡査にきいた方面の場所へ行き見たる処、朝鮮人支那人等二、三百人位の人間が殺して山に積でありました。其近辺に平沢君の靴と思わるる靴が置いてありましたからです。

三、私の考では平沢君は自警団へも進んで出ており、極めて親切な要領の好い人ですから、殊に彼の場合演説をしたり、革命歌を唱えたり、又警察内で騒ぐ様な無謀な行動を採る様な人で無いと深く信じて疑いません。

四、尚私の考えでは平沢君は三日に連れて行かれると、其夜の中に殺されたものと考えられます。

右の通り相違ありません。

大正十二年十月十六日午後十時

東京市芝区新桜田町十九番地 松谷法律事務所ニ於テ

八島宗一

聴取人弁護士 松谷与二郎

立会人 // 山崎今朝弥 ①

前衛的なポスター、装幀、油絵で知られる柳瀬正夢は、田端や本郷でボヘミア的な年月を送りつつ、十五歳で院展に入選した。雑誌『我等』を創刊したばかりの長谷川如是閑と大山郁夫に個展を機縁として知り合い、大正デモクラシーを唱導する知識人ふたりから保護と影響を受ける。同時に村山知義らと新興美術の一派マヴォを組む、『読売新聞』に時事漫画を書き続けた。大正十二年八月大山の静養に付き添つて房総海岸に滞在し、一足先に帰京した彼は、大山の留守宅で大地震に驚愕する。下宿に戻つて、深夜検束されるのはその二日後である。綴られた柳瀬の自叙伝は数頁にすぎぬが、なかでは震災における検束と新生への改心が中心的に記述される。②

検束の艱苦と新生への戒心（柳瀬正夢「自叙伝」）

彼が自叙伝を書くという。僭越の至りである。だが恐らく彼はこれを最初にして最後のものとするであろう。来順番好機不可逸。この機会にでも彼ひとつ生活過程を整理し、同時に即刻彼のこの過去帳を埋葬せね

① 『亀戸労働者殺害事件調査一』（『二村一夫著作集』別巻二。online.）

② 柳瀬信明『柳瀬正夢を語る』（『ねじ釘の画家』柳瀬正夢展）ムサシノ出版、一九九〇年。二二二―二七頁。

ばならない。ぼやけた彼の記憶よ、やすらかに成仏しろ！

彼の生年？ 大正十二年。 月日は？ 九月一日。

全く真面目で言っているのである。彼はぐうだらでありし過去の襤褸をば、此の日きれいさっぱりと棄てたから。関東大震災の焼土の中に。

そして彼の更生使命は？ 組織的無産階級解放運動。・・・

大正十二年九月一日の関東の大震災は、私の終始した観念的ニヒリズムを根こそぎ持って行ってくれた。何の馬鹿々々しいと思ひ乍らも、此の災変を限界に更生したことが今頃になって意識されてきた。避暑の房州から皆より二日先に帰京して、大山さんの戸塚の邸の留守番をしていたことが禍因となった。

その夜たしか震災三日目であったと思ふ。十二時過の下宿の二階の夜警から帰って余震に揺れる蠟燭の灯に、漫画日記をつけていた時突然私は襲はれた。後で家宅捜索に取散された部屋一杯の乱雑さと、夜具の上などに残っていた土足の跡などを数えて、私は当夜の物々しさに改めて驚いたが、それは私が街路へ引出されて下宿に背を向け、懐手のまま直立不動を強いられている間に行はれたものとみえる。予審判事達の自動車二台が暗の中に棄ててあるのを見た。私は軍隊の銃剣包圍の中で、中尉に命令された夜空の一方をみつめてゐた。やられるものと覚悟していたが、その瞬間の落ちついた英雄的な気持を今辱かしく思っている。私は馬鹿だった。

親しかった近処の人達は私の敵にと一変した。罵言、弓張、日本刀、鳶口、竹槍、石ころ、銃剣、そして暗、里程、護送中の軍隊、その他の乱暴さ愚昧さをいま詳述する自由と暇を持たないが、自警団の名によって表されたおろかな民衆の姿を見た。警察の狂乱。

私は戒厳令下の仮設中隊本部から淀橋署に引渡されて、留置場にたたきこまれた。隣檻に五年振の友達が居たりなどした。格好な其処は私の天国だった。

五日間のち私は此の安全地帯から放り出され、長谷川さんの忠告に従い一カ月許り門司に帰った。私は彼等の宣伝のあらゆる仮面を見た。じつとしてはいなかった。私は行動を引ずった。①

大山郁夫は当時早稲田大学の政治経済学部で政治学の講義を担当していた。大震災の三カ月前、六月四日に治安当局の検事一団は、佐野・猪俣両講師を捜索するとして、早稲田大学構内に立ち入る。彼らは恩賜官研究室なる大山教授の机上をも点検し、風呂敷包一個と紙包一個の書類等を押収した。これに対して同月二六日神田のキリスト教生年會館で抗議集會が開かれ、三宅雪嶺の講演に続いて大山は、落涙しつつ学問の自由と大學の自治を訴えた。大地震の翌日戸塚の留守宅が捜索され、自邸に戻った彼は九月七日、多数の武装兵士によって憲兵隊臨時駐屯所に連行され監禁される。② 柳瀬正夢の検束と収監はみずから推断するのとおり、大山への弾圧に起因したであろう。

大山郁夫に師事し、のちに彼を党首とする労働農民党に参じる田部井健次は、大震災の第七日恩師の消息を心配し、戸塚の大山邸を訪ねた。房総から帰宅した夫妻は無事で、田部井も朝食を共にする。その間に数十人が邸

① 「自叙伝」『柳瀬正夢全集』三人社、二〇一三年。第一巻、二〇、二七一―二八頁。

② 『早稲田大学百年史』、早稲田大学出版部、一九九七年。第三巻 三四〇―三三二頁。

宅を包囲して、政治学者大山を検束し、これに應對する田部井もみずから望んで憲兵隊屯所に監禁された。かねて陸軍では大山郁夫襲撃の計画がなされていた。田部井による小冊子『大山郁夫』には、震災に乗じた思想弾圧の一端が痛切に語られる。

憲兵隊による大山郁夫の拘禁（田部井健次著『大山郁夫』）

私が戸塚の先生のお宅へ着いたのは、朝の九時ころでしたが、内玄関の戸を開けると、直ぐその突き当りのところにある食堂から先生と奥さんのにぎやかな笑い声が聞えて来ました。ははあ、もう帰って居られるな、と思って私は直ぐに上へあがり、大急ぎで食堂の戸を開けると、先生と奥さんは食事をしておられました。私も直ぐに朝めしを御馳走になることにし、一緒にめしを喰べながら、当時の東京の状況を先生に詳しく報告しました。大杉さんのことは私はまだ何も知って居りませんが、堺利彦老人を中心とする数名の人々が獄中で殺されたらしい、というようなことや、江東方面でだいぶ多くの同志が殺されたらしいという噂など、私の聞き知って居た限りのことを報告し、最後に私は「先生！我々も東京にいては危いです。も一度田舎へ逃げ出すことにしませんか」ということを提案しました。

と、丁度そのときです。当時大山先生のところへ書生さんをしておったS君があわてふためいて食堂の戸を開け、「大変です！いま兵士たちが剣つき鉄砲を持って玄関のところへ押し寄せて来ています！」というのです。・・・玄関のそとにいたのは約二十人ほどでしたが、なお垣根のところにも二間に一人くらいの割合で兵隊が配置されているのがちらりと見えました。多分家の周囲全体をぐるりと取りかこんでいるのでし

よう。全部で五十人くらいの兵隊が動員されてきているらしいのです。・・・

僕は若い将校との談判を終えるや否や、直ちに奥へ取ってかえし、先生にこう言いました。「先生！どうどうやって来ましたよ、憲兵隊本部の命令で先生をつれに来たのです。家の周囲はもう兵隊に取りかまれました。逃げようとしてもとても不可能です。僕も一緒に行きますが、これが最後になるかも知れませんが、その覚悟で行くことにしましょう」と。・・・

やがて支度が出来たので、今度は先生と僕と二人で玄関へ出て行きました。そこには例の若い将校が相変わらずいかめしい顔をして控えていました。彼は最初の論争があつてからは、敢えて上へあがろうとせず、じつとそこに待っていたのです。先生はその若い将校に向かっていかにも静かに、「ごくろう様です」という丁寧な挨拶をなさいました。その将校も黙って目礼し、我々はそのままでやどやと玄関の外へ出ました。先生と僕とを中にして、前方には約二十人くらいの、後方には約三十人くらい兵隊が、四列縦隊に整列しました。そのとき表の方を見ると、垣根のそとに約百三十人位の人たちが、群がり集って何かやがやと話合っています。多分近所の人たちが噂をききつけて集まって来たのだと思います。・・・

やがて私たちは約一時間ほど歩いて、落合の憲兵隊屯所へ着きました。そこは普通の住宅を臨時に憲兵隊屯所にあてたものですが、相当に広い家で、その家の庭には多数の兵隊があちらこちらに屯していました。その家の八畳ほどの広さの板敷きの応接室でした。時間は十一時少し前だったと思います。私はその部屋へ入れられるや否や、とっさにまどのところ行って外の様子を見ましたが、そのまどの直ぐ下には十数人の兵隊が屯しているの、いざとなってもそこから逃げ出す可能性は全く無さそうです。・・・

我々ふたりは相変わらず応接室に監禁されたままです。そこはもうすっかり暗くなり、やがて八時近くに

のですが、まだ何の音沙汰もありません。「どうするつもりなのだろうか、殺すなり、帰すなり、さっさと片づけたらいいではないか！」と僕は腹の中で少々いらいらしながら考えました。が、やがて四、五人の将校がどやどやと部屋の中へ入って来ました。そしてその中の大将株の男が、「どうもいろいろ御迷惑をかけましたが、もう帰っても宜しいです。御留守中にお宅の家宅搜索をやりましたが、どうぞ悪からず」という挨拶をしました。……

かくして先生と僕とはその晩の九時近くに無事に家へ帰って来ました。しかし、僕が憲兵隊屯所でかえりがけに「別段用事も無いのに、我々をこんなところにひっぱって来て云々、」と言ったのは、実は全く僕の誤解でした。彼らにはやはり「重大な用事」があったのでした。後で判ったのですが、彼らは最初から暗殺の目的で、先生を憲兵隊屯所へひっぱったのだそうです。

あの大地震があつて数年後労働農民党の支部が全国各地に確立され、華々しい闘争を展開し始めた頃のことです。四国の或る町の町長で、極めて熱心に労働党を支持していたひとりの老人がありました。その人が或る時労働党の数人の黨員にこんなことを話したそうです。

「諸君は何も知らないだろうが、君たちの党首の大山さんは、大震災の時に危く殺されかかたんだよ。陸軍の或る秘密本部の方針で、大山さんを、あのどきどきまぎれに暗殺することになり、憲兵隊が大山さんを自宅から落合の屯所へ引っぱったのだが、その引っぱり方が余り大げさだった為に、付近の民衆が騒ぎ出し、それをまた新聞社が嗅ぎつけ、四方八方へ電話をかけて大山さんの行方を探したものだから、憲兵隊でもとうとうおおやまさんを殺すわけにはいなくなつて了つたのさ。大山さんという人は運のいい人さ！」と。

この話を聞いて黨員たちは、その老人が何故そんなことを知っているのか、その話に疑問を持ち、直ぐにそれを質問すると、その老人は大声で笑いながら、「実はわしはそのときの憲兵隊の参謀だったのさ」と、自分の前身を正直に告白したというのです。①

新劇の代表的な男優千田是也は、銀座服部時計店を設計した建築家伊藤為吉の六男である。早稲田大學の独文科に聴講生として在学中の大正十二年、千田は兄熹朔とともに人形芝居に熱中していた。動く人形で『セヴィリアの理髪師』などを演じるため、夏休み末に麻生材木町の小さな家を借り、模型舞台の装置を運び入れた。大部的な自叙伝で縷々語られるのは、大地震における市街への脱出と一家の対応である。朝鮮人騒ぎの余波を浴びた千田是也の受難、〈千駄ヶ谷のコリアン〉との誤認はよく知られる。

大地震の襲来と朝鮮人騒ぎの受難（千田是也著『もうひとつの新劇史』）

そこへ越した翌日の午ちかく、熹朔はなにかの買物に出かけ、私と川村君とは鴨居にずらりとぶらさげた人形の糸の具合を調べていた。すると急に家が上下、左右にものごく揺れだし、例の大正十二年九月一日の関東大震災がやってきた。廂から瓦がガラガラ落ちてくるので、うっかり外へも出られず、二人とも縁側の柱につかまって、いつ崩れるかと天井をにらんでいた。

そのうちにだいぶ揺れが納まって来たようなので、ともかく近所の様子を見てこようと、あいかわらず悲

劇的な顔をしながらブランブラン揺れている人形たちを袋に入れて押入れにしまい、細い路地をまっしぐらに走り抜けて材木町の大通りに出た。すると六本木のほうから熹朔が息せききってやって来て立ちどまりながら、「おれ、平河町へ行かなけりやならいから、家のほうを頼むよ」というと、またスタコラ引きかえしていった。

よしきたと私は勇みたち、余震のたびに墓石がゴロゴロ倒れている青山墓地を駆けぬけ、白い雲だか煙だかが、モクモクしている四谷から赤坂へかけての空をはずに見上げ、これはただごとではないぞとあわてながら、青山練兵場を千駄ヶ谷に抜け、やっと家にたどりついた。

さいわいこの辺は大した被害はなく、わが家も塀が倒れたり、瓦が落ちたりしただけで、みんな無事に裏の空地に避難していた。「熹朔はいつたいなにをしているのよ」と母はだいぶ不服そうだったが、私は熹朔のさっきの済まなそうな顔を思い浮かべて「だってあちは彼女と女中だけだし、仕方ねえよ」と弁解した。

その晩から私はやたらに忙しくなった。おやじの二号さんや三号さんや近い親類の安否を尋ねてあちこちを駆けまわされたり、その途中で罹災者の大八車を後押しをしたり、主人にはぐれてウロウロしているどこかの婆やさんらしいのを、佐々木たつもこんなことになっているのかなあと、つい日本橋から宮城前までおぶって行ったり、見つかった親類の家へリヤカーで食料をはこばされたり、夜警に引っぱりだされたり、日頃は細工物や本にへばりついている私でも、さてこういう事態のなかで駆けまわるのは、やはりうちでは一番うってつけの年齢だったわけであろう。

センダ・コレヤという私の芸名の由来であるあの事件が起きたのは、この大震災のたしか二日目である。個々の災が夜空を真っ赤にそめ、ときどきガソリンや火薬の爆発する不気味な音がきこえ、余震がくりか

えされ、通りには怪我人たちをせた担架や荷車をかこむ疲れはてた人たちの行列がつづくあの状況の中できくと、朝鮮人が日頃のうらみで大挙して日本人を襲撃してくるとか、無政府主義者や共産主義者が井戸に劇薬を投げこんでいるとか、道ばたで避難民に毒饅頭をくばっているとかいう馬鹿馬鹿しいデマまでが、なんとなくほんとうに思えてくるらしい。おまけに鉄衛がそのころ近衛の聯隊長をしていた古荘のところへ見舞いについて姉からきいてきた情報によれば、軍は多摩川べりに散開して、神奈川方面より大挙北上中の〈不逞鮮人集団〉と目下交戦中だという。

そこで私もじっとしていられなくなり二階の押入れにいられた長持の底から先祖伝来の短刀を持ちだして、いつでも外から取れるように便所の掃き出し口の小窓のかげにかくすと、登山杖をもって、お向いの勝ちゃんの従兄の大学生といっしょに、家のまえの警備についた。

そのうちに夜も更け、便々と待っているのも気がきかぬような気かしはじめ、敵情偵察というわけで、千駄ヶ谷の駅にちかい線路の土手にのぼっていくと、うしろのほうで「鮮人だ、鮮人だ！」という叫びがきこえた。ふりかえると、明治神宮の、当時はまだ原っぱだった外苑道路の闇の中をいくつもの提灯がちかづいてくるのが見えた。それをてつきり〈不逞鮮人〉をこっちへ追って来るものと思ひこみ、はさみ撃ちにしてやろうと走って行くと、いきなり腰のあたりを後からガンとやられた。おどろいて向きなおると、雲つくばかりの大男がステッキをふりかざして、「イタア、イタア！」と叫んでいる。

登山杖をかまえて後じさりしながら、「違う、違います！」といくら弁解しても、相手はいつかな聞きいれず、「センジンダア、センジンダア！」とステッキをふりまわしながら嗅ぎつづける。そのうち提灯たちが集まってきて、ぐるりと私をとり巻いた。みると、喚いている大男は千駄ヶ谷駅のまえに住む白糸ロシア

人の羅紗売りだった。そっちは朝鮮人でないことは一目瞭然だが、こっちはそうはいかない。その証拠に棍棒だの木剣だの竹槍だの薪割りだのをてんでに携えた、これまた朝鮮人だか日本人だか見分けのつけにくい連中が、「畜生、白状しろ」「ふてえ野郎だ、本籍を言え」「嘘をぬかすと、叩っころすぞ」と私をこづきまわすのである。

「いえ日本人です。ついこのさきに住んでいるイトウ・クニヤという、このとおり早稲田の学生です」と、学生証まで見せたがいっこう聞きいれず、薪割りや木剣を私の頭のうえに振りかざして「アイウエオ」を言ってみろの、「教育勅語」を暗誦しろのという。……ありがたや、だれかが後ろのほうから、「なあんだ、伊藤さんのお坊ちゃんじゃねえか。大丈夫だ、この人なら知っています」と言ってくれた。近所の酒屋の若い衆である。するともう一人、「そうだ、伊藤君だ」と、青年団の服を着た青年が前に出て来た。これは千駄ヶ谷教会の日曜学校に通っていた頃の友達だった。……

いま思えば、ナチスのユダヤ人狩りと同じように、あれは震災で焼け出され傷つき裸にされた大衆の支配層に対する不満や怒りを、民族的な敵対感情にすりかえようとした政府や軍部の謀略だったのであろう。

そんなエピソードをも含めて、あつとという間に東京の三分の二以上を焼け野原にしてしまったこの大地震は、私にいい薬になった。(救世軍の芝居)から『その妹』を経て、これが私の見た第三のリアルなドラマということになるわけだが、これはむしろ(救世軍の芝居)にちかく、だがもっとも大きく、もっとすさまじかった。言ってみれば、人間対人間のドラマもあり、人間対自然のドラマもあり、おまけにその両方が

きびしく巨大で、芸術青年の私はすっかり圧倒された。①

同じく築地小劇場の男優薄田研二は福岡の酒造家で生まれた。子どもの頃彼は郷土芸能(博多にわか)は熱中し、しばしば店先で黒板を背景に自演も披露する。富裕で芝居好きの父親が、評判の尾上松之助を招いて興行を支援し、宿として自宅を提供することもあった。やがて絵画の修行を始めた賢治は、入院を機縁に児島善三郎や倉田百三と知り合い、ついに大正九年倉田を慕って上京し牛込に下宿する。おりしも白樺派の文人たちが倉田の戯曲『俊寛』の上演を企画し、大森池上の料亭に設けられた舞台で彼は俊寛の役を演じた。②

演劇への志望と自宅の震災(薄田研二著『暗転ーわが演劇自伝』)

どうやら生活も落ち着いたころ、みやこ新聞の学芸記者をしていた上泉秀信さんから手紙がきて、村田実が地球座という劇団をつくって浅草で旗揚げ公演の準備をしている、行ってみたらどうかと、すすめてまいりました。白樺の人たち、武者小路先生、有島武郎先生、長与善郎先生なども、私のことについてはいろいろと心配して下さっており、またそういう関係で上泉さんも骨折ってくれているわけです。しかし私の内心は実はまだ絵のほうへ未練があつて、なかなか決心がつかずにいたのですが、妻の晴子も画家としてより俳

① 千田是也著『もうひとつの新劇史ー千田是也自伝』筑摩書房、一九七五年。五六―五八頁。

② 薄田研二著『暗転ーわが演劇自伝』東峰書院、一九六〇年。二九―三七頁。

優としてのほうが大成すると思う、と強くすすめることもあって、やっと芝居に入る決心がつき、じゃあ行ってみようかと、と腰をあげた瞬間、ぐらぐらときました。大正十二（一九二三）年九月一日、死者九万一千名余、五二万戸の被害家屋を出した関東大震災の第一震です。

東京では地震直後一四五カ所から火災がおこり、水道管破壊のためほとんど消火が行なわれず、火は風をよび、風はまた火をよんで、下町一帯をなめつくしました。・・・この混乱のなかで、一時的におこった無政府状態を利用して、為政者みずからが放った流言―不逞朝鮮人の暴動、社会主義者の蜂起―によって、ただでさえ冷静を失った民心に不安と動揺を与え、自警団を組織させ、朝鮮人と思えば撲殺し、軍隊、警察も内乱鎮圧の演習として直接手を下し、朝鮮人、社会主義者を犠牲にしたことは、永久に忘れることのできない恨事でした。・・・

さて私の家ははじめの一震でベチャンコになり、私は梁の下敷になってしまいました。しかし、何が幸いするかわかりません。若いころ病気勝ちだった体をきたえるために、から手を稽古したことがありましたが、針金を胸に撒いてブツリと切るぐらいのことは当時でもできましたが、そのから手の呼吸でどうにか危地を脱することはできました。しかし、東京は壊滅です。芝居や絵どころではなくなりました。家がつぶれたので行くところがない。倉田先生のお家は幸いつぶれずにすみましたが、あとのことを頼んでひとまず東京を引きあげることになりました。・・・

東京を離れるに際して私は倉田先生から、大阪におられる小山内薫先生に会って身の振り方を相談するようにという紹介状を頂きました。当時小山内先生は大阪のプラトン社という出版社の編集顧問をしておられ、月に一度ずつ下阪することにしていて、家族連れで関西に来ていて震災を知り、大阪定住を決意しておられ

た。私は伊丹に腰を落ち着けるとさっそく大阪へ先生を訪ねましたが、先生の頼みとする有楽座、明治座、市村座など都心部の劇場はみな焼け亡び、東京の再起はむずかしいのではないかと、と悲観的で腰をあげる様子はみられませんでした。

私は仕方なく伊丹で再び絵をかきはじめました。地三の手を引き、つま子を乳母車にのせ、自分はカンパスと絵具、それに酒をつめた魔法ビンとをかついで、尻端折りをして毎日絵を描きに出かけましたが、煙草は両切では面倒なので、葉巻にしましたから、伊丹のような田舎ではたちまち名物おとこになってしまいました。①

築地小劇場の人気女優田村秋子の父は、戯曲家田村西男であって、花柳界を題材とする彼の作品は帝国劇場や新橋演舞場でも演じられた。大地震の数カ月前女学校を卒業した秋子は、親睦会の素人芝居で初めて舞台に立つ。出しものはプーシキン原作の『大尉の娘』であり、父の縁故で新派の名優、花柳章太郎と井上正夫から事前に指導を受けた。彼女の経歴については聞き書き『ひとりの女優の歩んだ道』が遺される。

素人芝居の経験（田村秋子・小山裕士共著『ひとりの女優の歩んだ道』）

あたしは小劇場に入る前の年に、父に勧められて初めて父たちのやっていた通話会の舞台に出て、生まれ

て初めて芝居というものをしたんです。神田女学校を卒業した年でしたわ。通話会というのは文士劇ともいっていましたが、あたしがでた頃は他の職業の方たちも多く、同好の士の集まりとでも申しましょるか、坂本猿冠者、鳥居清忠、三宅孤軒といった方々がスターでした。出た動機は自分が舞台をやりたいうじやなくて、「人の前で芝居みたいなのをするのはずいぶん面白いよ。いちど経験してごらん」という父の無責任な進め方によって、引っぱり出されたんですよ。・・・

『大尉の娘』の初公演というのは花柳さんと井上さんが初めて二人でおやりになって、前の月にたいへんな評判だったんです。通話会で『大尉の娘』をやるうという事になったのも、先月のその舞台装置がそのまま同じ明治座に残っているの、おれを使えばいいっていうんで、選んだ出しものだったんです。で、あたしがとにかく一応やったら、井上さんはじつと黙って見ていらっしたんですが、何もおっしゃらないで、仏頂づらをして、いきなり羽織をお脱ぎになったんです。そして「これから私がお父さんの役をやっておあげるからやってごらんさい」とおっしゃって、素人の女の子を相手に、そりゃもう本気でやって下さるんです。井上さんって偉い役者だと思いましたわ。・・・とにかく夢中で汗だけで、その芝居であたし、芝居っていうものが忘れられなくなりましたし、芝居っていうものの魅力にとっつかれたかも知れないんです。それ以前は芝居をしたいっていうような気持ちは毛頭なかったんですけど、その芝居がすんでラクになって、この芝居の役にさようならかと思うと、たまたまなくなりましたね。・・・

通話会の素人芝居に出たのは、それ一回きりなんです。それから震災にあったのですから。あたしのそんな気持ちは父親にもわかったのでしょうか。「君ね、芝居したいだろう」と言ったんですよ。地震の最中に、ほうぼう避難して歩いてる最中に。で、あたしは言ったんです。「芝居したいわ。でも、あたしのような者

は役者になれない。」それよりも地震で焼けだされたあたしは、どこかに職をさがしてお金をとることを考えてたんですよ。ところが父はこういうんです。「どうせ何か仕事をするんなら雑誌の仕事をしろ。小山内さんがプラトン社にいるから、もしかすると、その女書生に使ってくれるかもしれないよ」って。そして大阪に行ったらっしゃる小山内先生に父が手紙でお願いしたら、先生、「僕たちの小劇場が近い将来に出来る。そのとき研究生として入れるからそれまで東京にいて待て」とおっしゃって下すったんです。「ああ、あたしはまたまた芝居が出来る」あたしはすっかりうれしくなっちゃいましたね。①

料理の達人としても著名な女優沢村貞子は、歌舞伎作者の娘として生まれた。同家の息子たちは子役としてはやくから舞台上に立ち、兄は四代目沢村国太郎、弟は映画俳優加東大介として大成する。男女平等を旨とする第一高等女学校で学んだ長女貞子は、女優として立てる新劇の道を志し、まずは築地小劇場の山本安英に相談の手紙を送った。彼女が大地震に襲われたのはその数年前、女学校三年のときである。大火によって浅草の自宅は焼尽し、父と母がひととき行方不明となった。自伝『貝のうた』には昼食時台所での衝撃や避難先における母親の奮闘が綿密に語られる。

歌舞伎一家の震災体験（沢村貞子著『貝のうた』）

① 田村秋子・小山裕士共著『一人の女優の歩んだ道』白水社、一九六二年。二二―二三、一五一―一七頁。

大正十二年九月一日の関東大震災大震災は、私が女学校の三年の二学期、始業式の日に起こった。学校から帰った私は、昼ご飯の仕度をしていた。父母も弟も芝居へ出かける直前だった。兄はひいきの客に連れられて、箱根へ行っていて留守だった。毎月朔日、十五日には小豆ご飯を炊くのが、芝居ものの習慣である。でき上がったご飯をお櫃に移し、お豆腐のおつゆの味をみようとお皿に口をもって行ったとき、突然ゴーツというなり声とともに家がぐらぐらとゆれ、あわててガスの火を消した私は、足がもつれて尻餅をついた。まわりじゅうの壁がバラバラと落ちて、鍋の中が白くにごった。

二階で掃除をしていた母が、階段から転げ落ちながら叫んだ。「早く火を！ガスを消して！」また激しくゆれて、やっとガスの元栓をしめた私の足元に、鍋が引っくりかえった。新聞をよんでいた父は、敷いていた座ぶとんを頭にのせて「ナミアミダブツ、ナミアミダブツ」と口の中でブツブツ唱えるばかりだった。そのまま動かないのは腰が抜けたらしい。

案内柱がしっかりしていたのか、わが家はひどくゆがんだだけで、つぶれなかった。丁度昼飯時だったせいもあって、あつという間に八方から火の手が上がった。みようにシンとした異様な空気のなかに、激しい叫び声、泣き声が鋭く耳を破った。余震は絶え間なくつづいた。

「私と父さんはもう少し様子を見るから、あんたたちはとにかくさきへ逃げなさい。」母は急いで小豆ご飯のはいったお櫃と三本の鯉節を私にわたしながら言った。弟にはお湯のはいったままの鉄瓶をもたせた。吾妻橋を渡って向島で落ち合う約束しているところへ、父の妹ひさ伯母とその養女で私たちの姉せい子が、着のみ着のまま転げながらたどりついた。ほんの一町と離れていないのに、ここまで来るのが命がけだったと、叔母はあおい顔でオロオロ泣くばかりだった。母の姉とみ叔母もかけこんできた。

「とにかくこの子といっしょに先にお逃げなさい」母は私の腰にずっしりと重い袋を結びつけた。五錢白銅ばかりはいった、うこんの財布である。そのころの芝居の当たり祝、大入り袋の中身は五錢の白銅玉だった。これが好景気時代の、母のただ一つのへそくりだった。

結局私たちは母と約束した向島へ行けなかった。吾妻橋の上で向島から逃げて来る人波に押し返されてしまった。川の向こうもあちこちに火の手が上がっていた。やっと上野の山へたどりついて、その夜をすごした。西郷さんの銅像の傍へやっと座れるだけの席をとった。あたりはいっぱいの人だった。その人たちが夜ふけとともにものを言わなくなった。不気味な静けさのなかで、動物園のライオンや虎のうなり声だけが、ときどき大きくこまりました。上野の森から見おろす下町には、何十本もの真っ赤な太い火柱が、空を焦がすように傲然と立っていた。仮借なく人間たちを焼き殺す地獄の火が、どうしてあんなに美しく見えたのだろうか……

母はきつと生きている。そして父を守っているにちがいない。私はそう信じていた。夜の明けるのを待って、私はその付近の貸家をさがした。庇が落ちて、ひどく汚いけれど、安い家が見つかった。屋根さえあればそれでいい。大家さんの米屋の主人に一生懸命たのみこんだ。やっと承知してくれた米屋さんは、畳の上に五錢白銅を前家賃として並べる十四歳の少女の顔を、あきれたように見つめていた。お米に味噌、鍋とふとんの借り賃を払っても、白銅はまだ何枚か残った。

二人の叔母と弟をそこに残して、私と姉は父母をさがしに浅草へ向かった。道々まだ何べんも自警団にとめられて本籍姓名をいわされた。恐ろしい噂はますます拡がっていた。焼けたあとはまだブスブスとくすぶっていた。こわれた蛇口からチョロチョロと流れでる水で、草鞋をしめさなければ歩けなかった。地熱で足

の裏がやけどしそうだった。

底だけがたった一カ所焼けのこった浅草観音堂へたどりついたのは、夕方近かった。境内には運よく命びろいをした人たちがいっぱいだった。「加藤伝太郎さーん。加藤マツさーん」姉と私は声をからしてよび歩いた。本堂の前の大銀杏の根もとに張ったボロ切れのテントから、「ここだよ！ここにいるよ！」母が這いだしてきた。つづいて父も「おい、無事だったか」と涙を浮かべてすがりついた。自慢の高い鼻が、すりむけて赤くなっていた。

「あら、貞ちゃん」近所の半玉のうさぎちゃんも、どろんこのアツパツパで顔をだした。長唄のお友達である。まっ黒に煤けた顔にサンバラ神一どうみても浅草きつての売れっ子の雛妓とおもえなかった。うさぎちゃんは「お貞ちゃんとおばさんのおかげで助かったのよ。たのもしかったわ。おばさんは、ほんとうに、」と溜息をついた。

その話によると、母は命からがらここへ逃げこんだ人たちを叱咤激励して、本堂に火のうつるのをふせいだという。そしてどうやら火が消えて、やっと落ちつくど、味噌屋の焼けあとからは焼け味噌を、肉屋の店からは焼き肉を掘り出して、まわりの人たちに公平にわけ、飢えをしのがせたそうである。①

〔未完〕

① 沢村貞子著『貝のうた』新潮社、一九八三年。四五―四七、四九―五一頁。